秋田県文化財調査報告書第203集

片山館コ遺跡発掘調査報告書

――一般国道7号大館西道路建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査――

1990・11

秋田県教育委員会

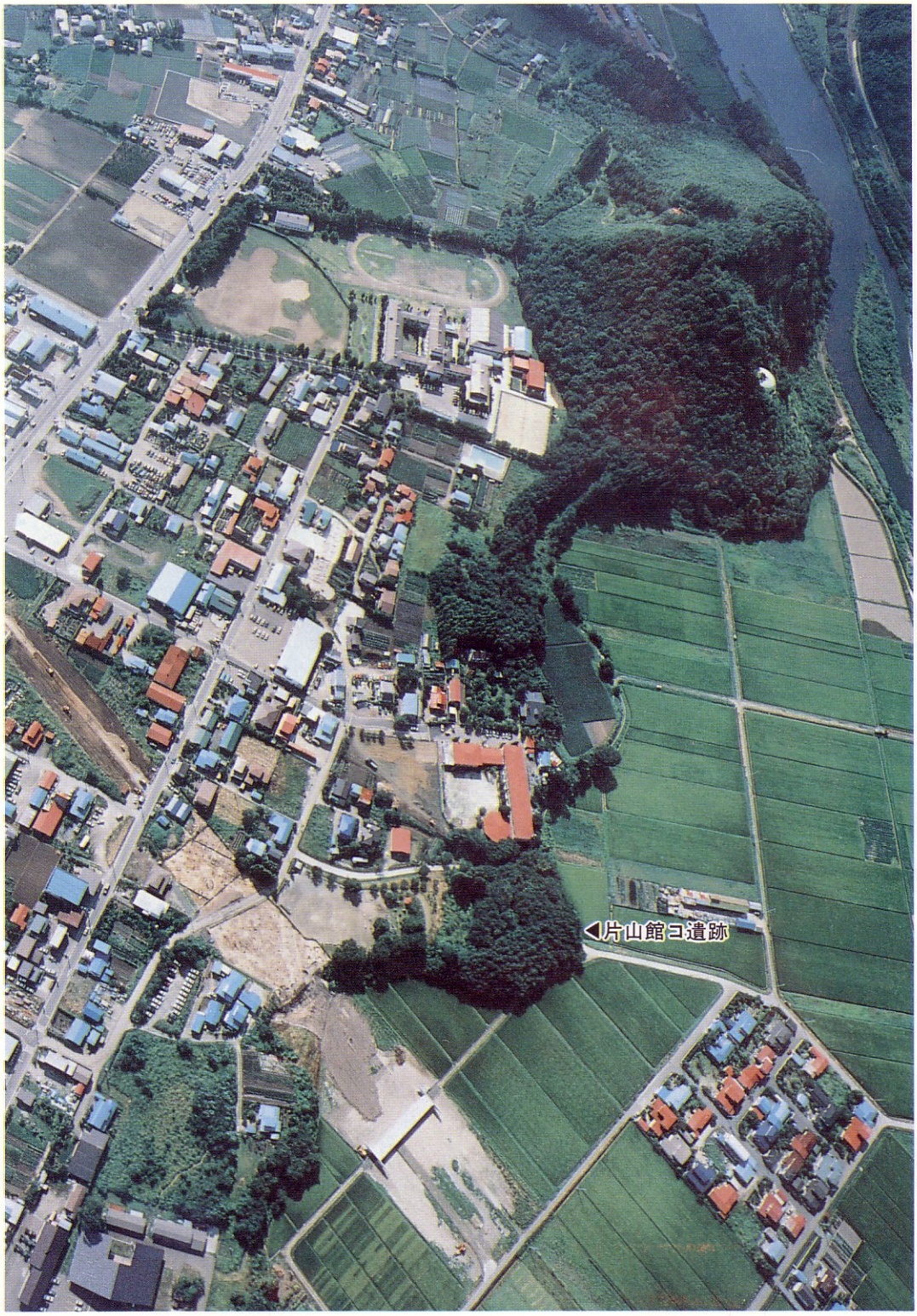
片山館コ遺跡発掘調査報告書

――一般国道７号大館西道路建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査――

１９９０・１１

秋田県教育委員会

巻頭図版1　片山館コ遺跡遠景（東から）



巻頭図版2　片山館コ遺跡遠景（上から）

序

本県には、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されております。この埋蔵文化財を保護し、後世に伝えてゆくことは、私たちの努めであります。

また、高速交通体系の整備を始めとする地域開発の進展は、今や県民全体の要望と言えましょう。

この埋蔵文化財の保護と地域開発との調和が、今日の重要な課題となっており、本教育委員会も鋭意この課題に取り組んでまいりました。

このたび、本県の高速交通体系の一部を構成する一般国道７号大館西道路が片山館ヨ遺跡を通過することとなり、本教育委員会は、原因者である建設省との協議の結果、遺跡の道路工事対象範囲についての発掘調査を実施いたしました。その発掘調査においては、中世の城館の範囲や空堀の構造を明らかにすることができました。

本報告書は、これらの調査成果をまとめたものであります。本書が埋蔵文化財の保護のために広く活用され、同時に郷土の歴史資料として役立てば、幸いです。

最後になりましたが、本調査の実施並びに本報告書の刊行に当り御援助、御協力をいただきました建設省東北地方建設局能代工事事務所、大館市教育委員会を始め関係各位に対し、厚く御礼申しあげます。

平成２年11月１日

秋田県教育委員会

教育長　橋本　顕信

例　言

1　本書は、大館市片山三丁目26－1外に所在する片山館ヨ遺跡の一般国道7号大館西道路建設工事に係る発掘調査報告書である。

2　第1図の地形図は、国土地理院発行5万分の1『大館』・『碇ヶ関』図幅を7万5千分の1に縮小したものである。

3　第2図・第3図の地形図は、建設省東北地方建設局能代工事事務所提供の2千5百分の1平面図に基づく。

4　陶磁器の鑑定は、大橋康二佐賀県立九州陶磁文化館学芸課資料係長にお願いした。

5　石器の石質鑑定は、佐々木厚秋田県立博物館学芸主事による。

6　土色の表記は、農林省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』4版　1973（昭和48年）に拠った。

7　本書の執筆は、埋蔵文化財センター学芸主事榮　一郎が行った。

凡　例

1　本書で使用した方位は国土座標第Ｘ系座標北である。

2　各遺構に付した略記号は以下の通りである。

ＳＤ：空堀・溝　　ＳＮ：焼土遺構　　Ｐ：柱穴

3　各遺構番号は報告書作成段階に調査時点の遺構番号を変更した。その対応は以下の通りである。

報告書遺構番号	調査時遺構番号	報告書遺構番号	調査時遺構番号
ＳＤ01	ＳＤ24	ＳＤ10	ＳＤ42
ＳＤ02	ＳＤ25	ＳＤ11	ＳＤ43
ＳＤ03	ＳＤ23	ＳＤ12	ＳＤ44
ＳＤ04	ＳＤ36	ＳＤ13	ＳＤ10
ＳＤ05	ＳＤ30	ＳＤ14	ＳＤ11
ＳＤ06	ＳＤ29	ＳＤ15	ＳＤ12
ＳＤ07	ＳＤ08	ＳＤ16	ＳＤ04
ＳＤ08	ＳＤ40	ＳＤ17	ＳＤ05
ＳＤ09	ＳＤ41	ＳＮ01	ＳＮ03

4　挿図中に使用したスクリーン・トーンは以下の通りである。

焼土　　大湯浮石　　石器の磨面

5　土器・陶磁器については１～の、石器についてはＳ１～の、木製品についてはＷ１～のそれぞれ通し番号を付した。

目　　次

例　　言
凡　　例

第１章　はじめに……１
　第１節　発掘調査に至るまで……１
　第２節　調査の組織と構成……１
第２章　遺跡の立地と環境……２
　第１節　自然的環境……２
　第２節　歴史的環境……２
第３章　発掘調査の概要……７
　第１節　遺跡の概観……７
　第２節　調査の方法と経過……７
第４章　調査の記録……10
　第１節　層序……10
　第２節　検出遺構と遺物……10
　１　中世の遺構と出土遺物……10
　（１）帯郭……10
　（２）空堀……17
　（３）柱穴群……24
　２　時期不明の遺構……24
　（１）溝……24
　（２）焼土遺構……30
　（３）柱穴様落ち込み……36
　第３節　遺構外出土遺物……36
　１　土器・陶器……36
　２　石器……38
第５章　まとめ……39

挿　図　目　次

第１図　片山館ヨ遺跡の位置と
　　周辺の遺跡分布……３
第２図　遺跡周辺の地形……８
第３図　遺構配置図……11・12
第４図　調査区土層図……13・14
第５図　北東斜面（３トレンチ）
　　土層図……15・16
第６図　空堀ＳＤ01・02、溝ＳＤ04…19・20
第７図　空堀ＳＤ01・02、溝ＳＤ04
　　土層断面……21・22
第８図　空堀ＳＤ01・02出土遺物……23
第９図　柱穴群平面図……25・26
第10図　溝ＳＤ03・05・06……29
第11図　溝ＳＤ07……31・32
第12図　溝ＳＤ08・09・10・11・12……33
第13図　溝ＳＤ13・14・15・16・17……34
第14図　焼土遺構ＳＮ01……35
第15図　焼土遺構ＳＮ01出土遺物……35
第16図　遺構外出土土器・陶器……36
第17図　遺構外出土石器……37

表　目　次

第１表　遺跡地名表……４
第２表　柱穴群一覧表……27

図 版 目 次

巻頭図版1　片山館ヨ遺跡遠景（東から）
巻頭図版2　片山館ヨ遺跡遠景（上から）
図版1　1　調査前近景（南西から）
　　2　調査後近景（南西から）
図版2　1　帯郭（北東から）
　　2　帯郭（北から）
図版3　1　ＭＡ48区周辺土層（東から）
　　2　ＬＱ54区周辺土層（南東から）
　　3　北東斜面３トレンチ（帯郭）土層（北西から）
図版4　1　空堀ＳＤ01・02確認（西から）
　　2　空堀ＳＤ01・02（西から）
図版5　1　空堀ＳＤ01（南東から）
　　2　空堀ＳＤ01Ａ－Ｂ断面土層（南西から）
　　3　空堀ＳＤ01Ｃ－Ｄ断面土層（西から）
図版6　1　空堀ＳＤ02（西から）
　　2　空堀ＳＤ02Ａ－Ｂ断面土層（西から）
　　3　空堀ＳＤ02Ｃ－Ｄ断面土層（南西から）
図版7　1　空堀ＳＤ01出入口部（南東から）
　　2　空堀ＳＤ02出入口部（南から）
　　3　空堀ＳＤ01砥石出土状況（南から）
　　4　空堀ＳＤ02木製品出土状況（西から）
図版8　1　柱穴群（南東から）
　　2　溝ＳＤ03（南東から）
　　3　溝ＳＤ04（南東から）
図版9　1　溝ＳＤ05（奥）・06（手前）確認（北東から）
　　2　溝ＳＤ05（奥）・06（手前）（東から）
　　3　溝ＳＤ07（東から）
　　4　溝ＳＤ07土層（東から）
図版10　1　溝ＳＤ08（右）・10（左）確認（東から）
　　2　溝ＳＤ13（右）・14（中）・15（左）確認（東から）
　　3　溝ＳＤ13（右）・14（中）・15（左）（東から）
図版11　1　溝ＳＤ16（右）・17（左）確認（南から）
　　2　溝ＳＤ16（右）・17（左）（南から）
　　3　焼土遺構ＳＮ01確認（東から）
　　4　焼土遺構ＳＮ01（東から）
　　5　焼土遺構ＳＮ01礫群（東から）
　　6　焼土遺構ＳＮ01土層（東から）
図版12　遺構内出土遺物
図版13　遺構外出土遺物

第１章　はじめに

第１節　発掘調査に至るまで

大館西道路は大館市根下戸新町地区を起点とし、同市商人留地区間延長6.24㎞を結ぶ計画である。計画路線内には周知の遺跡である片山館ヨ遺跡が存在する(註１)ことから、県教育委員会は昭和63年11月８・９日に遺跡の範囲確認調査を実施した。その結果、路線内の遺跡面積は3,850㎡に及ぶ(註２)ことが明らかとなった。

この範囲確認調査の結果に基づいて県教育委員会と建設省能代工事事務所とが協議し、平成元年度に発掘調査を実施することとなった。

第２節　調査の組織と構成

調査主体者　秋田県教育委員会

調査担当者　榮　　一郎　秋田県埋蔵文化財センター学芸主事
　　栗澤　光男　秋田県埋蔵文化財センター文化財主事
　　進藤　良平　秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員
　　吉田　　真　秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員
総務担当　佐田　　茂　秋田県埋蔵文化財センター主査
　　高橋忠太郎　秋田県埋蔵文化財センター主事

調査協力機関　建設省東北地方建設局能代工事事務所・大館市教育委員会

註

1　本遺跡は昭和46・47年大館市史編さん委員会による発掘調査によって、連郭式の中世城館であるほか、続縄文～中世にかけての複合遺跡であることが明らかとなっている。

大館市史編さん委員会『大館市片山「館ヨ」発掘調査報告書　第１次』1973（昭和48年）

大館市史編さん委員会『大館市片山「館ヨ」発掘調査報告書　第２次』1974（昭和49年）

2　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』1989（平成元年）

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　自然的環境

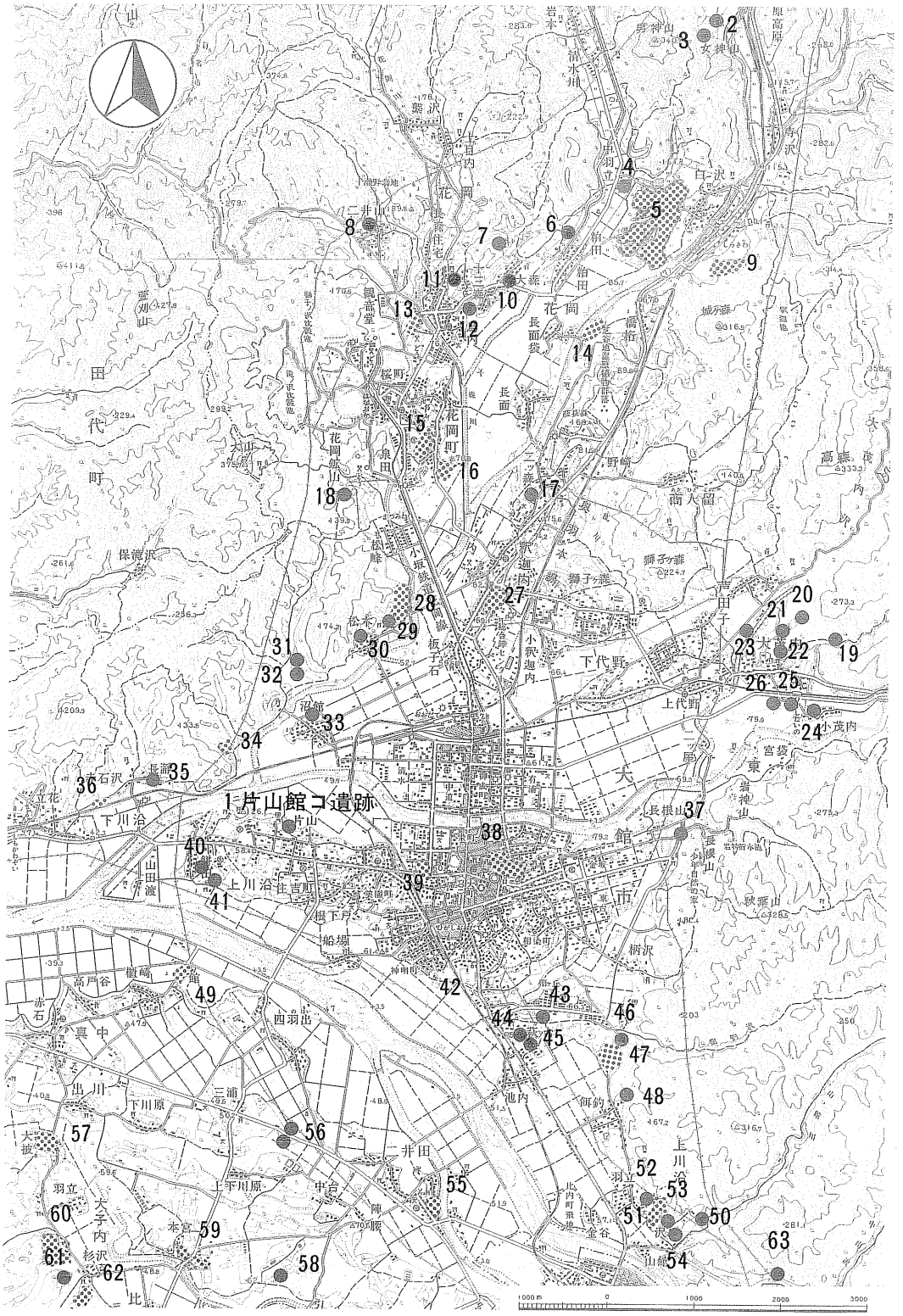
片山館ヨ遺跡が存在する大館市は秋田県の北東部に位置し、東は鹿角郡小坂町、南は北秋田郡比内町、南西は北秋田郡鷹巣町、西は北秋田郡田代町に接し、北西及び北縁は青森県との県境となっている。市域は大きくは標高200～800ｍ前後の山地と標高40～100ｍ前後の盆地とから成る。前者はいわゆる出羽山地の一部で、北西側に白神山地、東側に高森山地、南西側に摩当山地が存在する。後者は断層による陥没盆地で、内部には米代川・長木川・下内川・犀川等の河川が存在し、これらの河川の営力によって大館段丘地や低地が形成されている。大館段丘地は南北を米代川と長木川とに挟まれ、西側を頂点とする縦長の二等辺三角形状を呈し、段丘地縁部は小規模の侵蝕谷によって開析され、入り組んだ地形をなす。

片山館ヨ遺跡は大館段丘地北西縁の東西が開析された北向きの舌状台地に立地している。この舌状台地は東西幅約40ｍ、南北長約160ｍを測り、台地上面の標高は57～60ｍ前後、北側の段丘崖下の長木川低地との比高差は10ｍ前後である。

第２節　歴史的環境（第１図、第１表）

大館市内においては、旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺跡は少ない。松木高館平遺跡（29）で旧石器時代のナイフ形石器が採集され、鳶ケ長根Ⅳ遺跡(註１)・上ノ山Ⅰ・Ⅱ遺跡（53・54）などで縄文時代早期の土器が若干発掘されている程度である。縄文時代前期以降になると遺跡数・遺物量とも増加し、発掘調査された遺跡には　上ノ山Ⅰ・Ⅱ遺跡（53・54）、福館・橋桁野遺跡（14）、芋掘沢遺跡（41）、諏訪台Ｃ遺跡（22）などがある。このうち、上ノ山Ⅰ遺跡では縄文時代前期の竪穴住居跡が、福館・橋桁野遺跡では縄文時代中期の竪穴住居跡などが、諏訪台Ｃ遺跡では縄文時代後期の竪穴住居跡が、上ノ山Ⅱ遺跡では縄文時代後期～晩期の竪穴住居跡がそれぞれ検出されており、縄文時代の集落の一端を窺うことができる。

弥生時代になると、確認された遺跡は少なく、諏訪台Ｃ遺跡（22）、上の山Ⅰ遺跡（53）、福館・橋桁野遺跡（14）のほか本片山館ヨ遺跡（１）などが挙げられる。諏訪台Ｃ遺跡では弥生時代前期の６軒の竪穴住居跡が確認されている。片山館ヨ遺跡では弥生土器のほか、北海道を中心に分布する続縄文土器が以前の大館市史編さん委員会による発掘調査によって検出されている。



第１図　片山館コ遺跡の位置と周辺の遺跡分布

番号	遺跡名	時期	文献・備考	番号	遺跡名	時期	文献・備考
1	片山館コ	弥生時代～中世	⑤⑧	33	沼館	縄文時代後期	⑩
2	小立	縄文時代後期～晩期	⑩	34	沼館跡	中世	⑪
3	矢立廃寺	中世	③⑦⑬	35	赤石沢	縄文時代中期～晩期	⑩
4	中羽立	縄文時代後期	②	36	押館跡	中世	⑪
5	大館野	縄文時代・古代・中世	⑰	37	長根山公園	縄文時代晩期	⑩
6	粕田	古代	⑨	38	大館城跡	中世・近世	⑪
7	豆岱	縄文時代晩期	⑩	39	土飛山館跡	中世	⑪
8	二井山	縄文時代晩期	⑩	40	餅田屋布添	縄文時代前期	⑩
9	白沢古館跡	中世	⑪	41	芋掘沢	縄文時代前期・中期	④
10	大森	縄文時代前期	⑩	42	小館花館跡	中世	⑪
11	本郷下	縄文時代晩期	⑩	43	萩の台	縄文時代中期	⑩
12	十三森	縄文時代	⑩	44	池内B	縄文時代前期～後期	⑩
13	七ッ館跡	縄文時代晩期・古代・中世	⑪	45	池内A	古代	⑩
14	福館・橋桁野	縄文時代前期・中期・弥生時代・中世	⑥⑪	46	上野	縄文時代	平成元年確認
15	花岡城跡	中世	⑪	47	餌釣館跡	古代～中世	⑪⑮⑳
16	女目館跡	中世	⑪	48	餌釣	縄文時代・古代	⑭
17	芝谷地	縄文時代後期	⑩	49	櫃崎館跡	中世	⑪
18	大山板碑		⑩	50	山館	縄文時代前期・晩期	⑩
19	小茂内沢	縄文時代	⑩	51	山館跡	中世	⑪
20	諏訪台A	縄文時代中期	⑩	52	羽立	縄文時代晩期	⑩
21	諏訪台B	古代	⑩	53	上ノ山I	縄文時代早期～晩期・弥生時代	⑯
22	諏訪台C	縄文時代前期・後期・晩期・弥生時代・古代	⑲	54	上ノ山II	縄文時代早期～晩期	⑯⑱
23	大茂内	縄文時代晩期	⑩	55	新田館跡	中世	⑪
24	茂内	縄文時代前期	⑩	56	ケラキ森塚	近世	①
25	塚下A	縄文時代後期	⑩	57	大披館跡	中世	⑪
26	塚下B	縄文時代後期	⑩	58	本宮	縄文時代晩期	⑩
27	釈迦内館跡	中世	⑪	59	本宮館跡	中世	⑪
28	松木高館跡	中世	⑪	60	大子内館跡	中世	⑪
29	松木高館平	旧石器時代	⑫	61	薬師袋	古代	⑩
30	松木	縄文時代前期	⑩	62	杉沢館跡	中世	⑪
31	鍛冶屋敷I	古代	⑩	63	兎沢	縄文時代	⑩
32	鍛冶屋敷II	縄文時代後期	⑩				

第1表　遺跡地名表

古墳時代に相当する時期の遺跡は現在のところ認められない。古代の遺跡には片山館ヨ遺跡（１）のほか池内Ａ遺跡（45）、餌釣館跡（47）、餌釣遺跡（48）、粕田遺跡（６）、大館野遺跡（５）などがある。このうち大館野遺跡では58軒の竪穴住居跡が掘立柱建物跡などとともに確認され、粕田遺跡では７軒の竪穴住居跡と３棟の掘立柱建物跡などが確認されている。このほか池内Ａ遺跡でも竪穴住居跡１軒が確認されている。

中世の遺跡には城館跡がある。大館市内では片山館ヨ遺跡（１）を始めおよそ30箇所あまりの城館跡が知られている。浅利氏の家臣が館主とされるものが多く、いわゆる一村一館型のものが一般的である。片山館ヨ遺跡の北西約１㎞には長木川を挟んで沼館跡（34）が、東南東約1.5㎞には土飛山館跡（39）が、米代川を挟んで西南２㎞には櫃崎館跡（49）が存在する。いずれも未調査のため時期・構造等は不明であり、片山館ヨ遺跡との関係も明らかではない。これらの城館に限らず、大館市内では城館の調査例が乏しく、その実態は不明な部分が多い。

中世の遺跡には城館跡のほかに矢立廃寺（３）がある。ここでは総門、仏殿、法堂などが確認されている。以上のほかには現在のところ確認された中世の遺跡は少なく、中でも当時の集落の様相や農業生産の在り方は不明瞭である。(註２)

註

1　秋田県教育委員会『国道103号線バイパス工事関係遺跡発掘調査報告書』1981（昭和56年）

2　本章執筆には大館市史編さん委員会『大館市史　第一巻』1979（昭和54年）を参考にした。

第１表文献

①工藤吉次郎「近世に於ける道路開発の地理学的研究」『秋大地理』２　1955（昭和30年）

②秋田県『秋田県史考古編』1961（昭和36年）

③奈良修介・板橋源『矢立廃寺跡発掘調査略報』1964（昭和39年）

④大館市教育委員会『芋掘沢遺跡発掘調査報告書』1972（昭和47年）

⑤大館市史編さん委員会『大館市片山「館ヨ」発掘調査報告書　第１次』1973（昭和48年）

⑥大館市史編さん委員会『福館遺物包含地・橋桁野竪穴住居址発掘調査概報』1973（昭和48年）

⑦大館市史編さん委員会『大館市松原　矢立廃寺発掘調査報告書』1973（昭和48年）

⑧大館市史編さん委員会『大館市片山「館ヨ」発掘調査報告書　第２次』1974（昭和49年）

⑨大館市教育委員会『粕田遺跡発掘調査報告書』1974（昭和49年）

⑩秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図』1976（昭和51年）

⑪秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』1983（昭和58年）

⑫大館市役所史跡探訪会「大館の歴史散歩　遺跡と遺物⑧」『大館市広報 NO.425』1986（昭和61年）

⑬大館市教育委員会『矢立廃寺』1987（昭和62年）

⑭秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』1987（昭和62年）

⑮秋田県教育委員会『国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査概報－山王岱遺跡－』1988（昭和63年）

⑯秋田県教育委員会『国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－上ノ山Ⅰ遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡－』1988（昭和63年）

⑰秋田県埋蔵文化財センター『秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』1990（平成２年）

⑱秋田県教育委員会『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－上ノ山Ⅱ遺跡－』1990（平成２年）

⑲秋田県教育委員会『諏訪台Ｃ遺跡発掘調査報告書』1990（平成２年）

⑳大館市教育委員会『大館市山王台遺跡発掘調査報告書』1990（平成２年）

第3章　発掘調査の概要

第1節　遺跡の概観

片山館コ遺跡は大館市片山三丁目26－1外に所在する。

遺跡は既述のごとく、大館段丘地の北西縁の北向き舌状台地上に立地する。台地は南北長約160ｍ、東西幅約40ｍを測り、台地上面の標高は57～60ｍ、北側の段丘崖下の水田面との比高差は10ｍ前後である。

1972・73年には大館市史編さん委員会によって、舌状台地の北側と南側の一部が調査されている（第2図）[註1]。調査の結果、遺跡は舌状台地中央部を横断する現状で幅約20ｍの空堀と、舌状台地基部を横断する三重の土塁とその間の2条の空堀とによってそれぞれ区画された北郭部と南郭部とからなる連郭式城館であることが判明した。また斜面中・下位に北側を除き平坦面（本書では帯郭と呼ぶ）をめぐらすことも確認されている。さらに北郭部からは平面形が長辺1.4～3.9ｍの長方形を呈する竪穴13基、重複する掘立柱建物跡2棟や溝などが、南郭部からはやはり平面形が長方形となる竪穴5基、掘立柱建物跡1棟、土壙墓1基、溝4条などが確認されている。このほか出土遺物には北海道を中心に分布する続縄文土器である後北Ｃ2式土器、回転糸切り底をもつ土師器坏、中近世陶磁器、銭貨（熙寧元宝、紹聖元宝、大観通寶）、鉄器などがある。出土遺物からは弥生（続縄文）時代から近世にかけて断続的に営まれた遺跡であったことが窺われる。

また、安政5年（1858年）頃の成立とされる『郷村史略』には「浅利家の士片山弥伝治と云もの居す」と記載されている[註2]。

今回の調査範囲は舌状台地基部の北東端から南西に向かって段丘内側に入り込んだ地域である。遺跡周辺の現況は舌状台地の先端部が雑木林、台地中央部から基部にかけてが公園となっている。台地基部の土塁は公園造成時に削平され、現状では確認できない。公園の南側では北西－南東方向に市道が走り、一部に住宅が存在するほかは荒れ地となっている。

調査面積は3,850㎡である。

第2節　調査の方法と経過

調査の区割は工事用中心杭NO.33（Ｘ＝30417.871，Ｙ＝25088.429）を基点（ＭＡ50）に、国土座標第Ｘ系座標北を南北基線、これの直交方向を東西基線として、４ｍ×４ｍごとの方眼

を組むこととした。南北線には基線をMAとして西に4mごとにMB・MC・MD…と正順に、東に4mごとにはLT・LS・LR…と逆順にそれぞれA～Tまでのアルファベット2文字を付し、一方、東西線は基線を50とし、北に向かって51・52・53…と増加し、南に向かって49・48

第2図　遺跡周辺の地形

・47…と減少するアラビア数字を付し、各方眼は東南角を通る南北線と東西線の呼称の組み合せで呼ぶことにした。

調査は6月12日に開始し、8月26日に終了した。調査開始当初は排土場所に予定している調査区北東側の斜面に4本のトレンチを設定し、斜面中段をめぐる帯郭の形成状況を検討するとともに、帯郭平坦面の平板測量を行った。これと平行して調査区中央を北西－南東方向に走る市道より南西側の部分の調査を開始し、調査区南端では多数の柱穴様落ち込み、2条の溝（SD16・17)、焼土遺構（SN01）などを確認・調査した。これらの遺構はいずれも時期決定可能な遺物を欠き、詳細な時期は不明であるが、柱穴様落ち込みや溝は覆土の特徴から近現代に属するものと推定した。6月下旬には調査区南西端で東西方向に走る3条の溝（SD13～15）を検出・調査した。これらの溝は現代の排水路にほぼ直角に取りつくことから近現代に属するものと判断した。

7月上旬からは市道北東側の調査を平行して開始し、北端で崖縁に平行する溝（SD03）を検出・調査した。7月中旬には市道南西側で現状で「コ」の字形に回る溝SD07を検出した。本溝は範囲確認調査において一部分確認され、城館に附随する遺構と想定されていたものであるが、その方向が現在の地割りとほぼ対応し、現代の排水路や宅地に切られていることから現代よりも若干溯る時期の所産かと推定した。

7月下旬以降は調査区北半部で2条の空堀（SD01・02)、空堀の北側で柱穴群などを検出し、調査を行った。SD01・02の調査では舌状台地基部のほぼ中央部に当る調査区西端で、堀を浅く掘り残した部分を検出し、この部分が郭への出入口部に当るものと想定した。

8月上旬以降は市道と空堀との間を中心に遺構確認作業を行ったが、遺構・遺物はほとんど確認できず、中世城館の南の範囲は現状では空堀までと判断した。8月22日には遺跡の航空写真撮影を行い、8月26日に現場作業を完了し、撤収した。

註

1　大館市史編さん委員会『大館市片山「館ヨ」発掘調査報告書　第1次』1973（昭和48年）
　大館市史編さん委員会『大館市片山「館ヨ」発掘調査報告書　第2次』1974（昭和49年）

2　大館市史編さん委員会『郷村史略』1972（昭和47年）

第4章　調査の記録

第1節　層序（第4図、図版3）

調査区の土層観察用の土手は市道部分を除き工事用の中心杭に沿って北東－南西方向に設定し、層序を記録した。本調査区の層序は大きくはⅠ～Ⅳ層に分かれる。

Ⅰ層は造成土もしくは表土層で、ａ～ｄに細分される。Ⅰａ層は1970年代の公園造成時の整地土層で、調査区北西部に認められる。Ⅰｂ層も整地土層で堅くしまっている。調査区中央を通る市道の周囲に広がっており、市道造成に伴うものと思われる。Ⅰｃ・ｄ層は、主に市道よりも西南側に分布する。市道西南側のⅠｃ層には部分的に1960～70年前後の宅地用地造成のための大形の円礫を多量に含んでいる。

Ⅱ層は耕作土である。大湯浮石粒が若干混在している。層厚10～30㎝前後を測るが、市道北東側ではしだいに薄くなり、北東端では消失する。調査区南側では本層から縄文土器・石器が出土するが、近現代磁器片なども混在しており、本層が本来の出土層準ではない。

Ⅲ層はいわゆるクロボク土である。層厚10～20㎝前後と薄く、調査区南側では認められない。本層とⅡ層との間には市道の北側周辺で部分的に大湯浮石の小塊が混在している。

Ⅳ層は地山漸移層である。Ⅲ層との境介は比較的明確であるが地山土との境介は漸移的である。地山土は、にぶい黄橙色シルト（10YR6/4）で、極めて固くしまり、ほとんど水を透さない。

本調査区は近現代の整地が何度か行われた結果、現地表はほぼ水平で、各層もみかけ上はほぼ水平に堆積している。しかしながらⅢ層が認められない調査区南半部ではⅡ層とⅣ層との境介は明瞭で、不整合の堆積状態を示している。このことから調査区周辺はその南半部を中心に地層の削平を伴うある程度の地形の変形を受けているものと思われる。

第2節　検出遺構と遺物

今回の調査で検出した主要遺構は帯郭、空堀2条、溝15条、焼土遺構1基、柱穴46基である。いずれも明確な時期決定可能な伴出遺物を欠くが、前二者と柱穴群は既往の調査結果から中世の城館に伴う遺構とし、その他は時期不明の遺構として扱う。

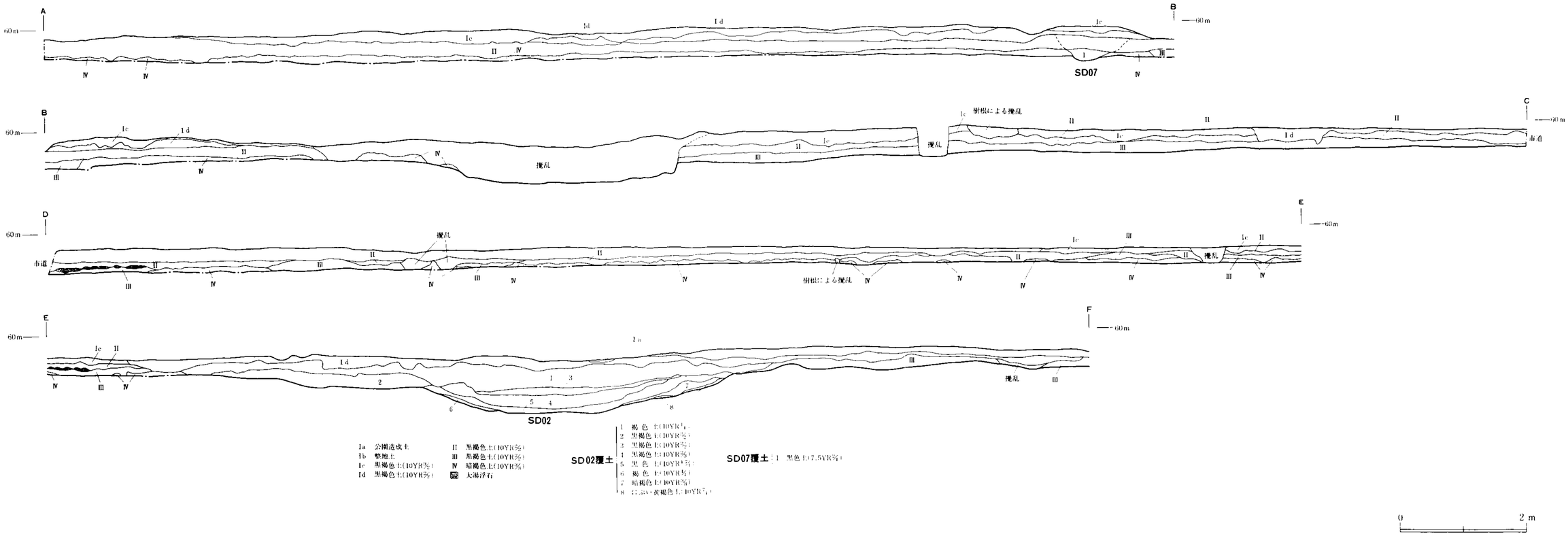
1　中世の遺構と出土遺物

（1）帯郭（第3・5図、図版2・3）

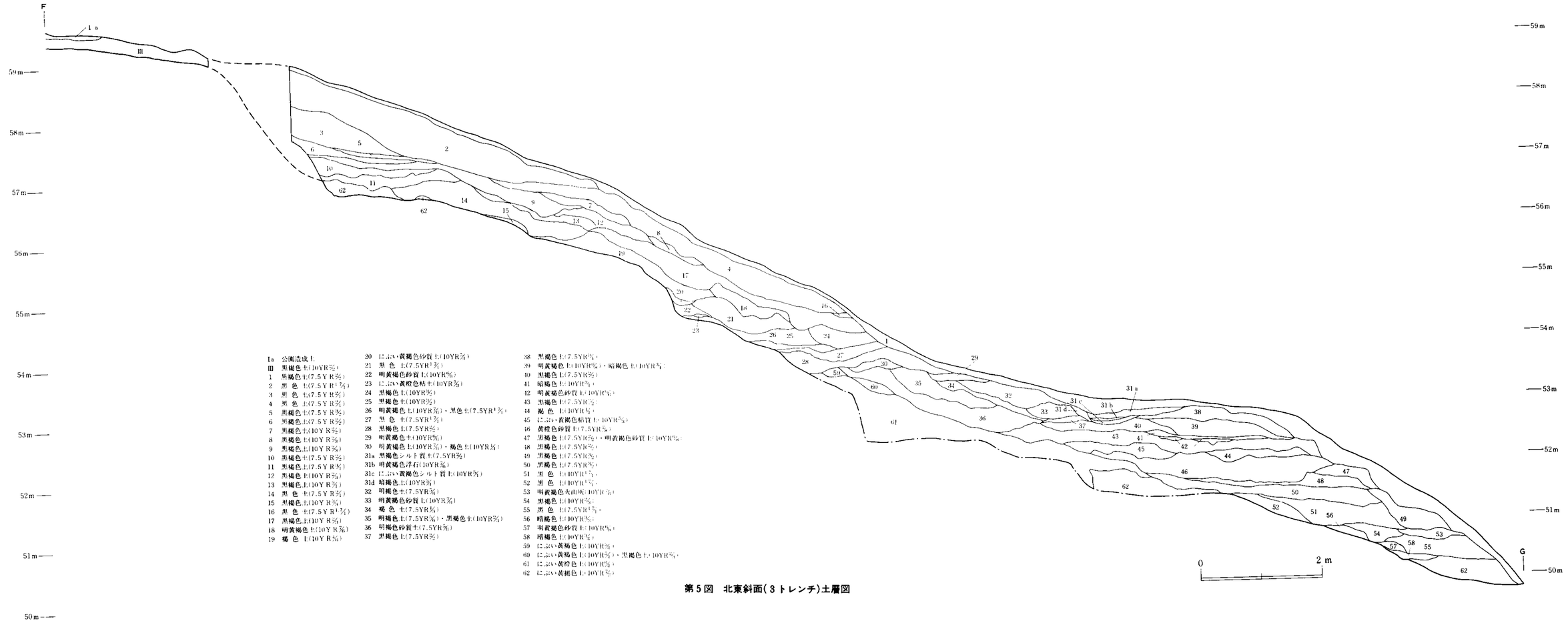
台地斜面をめぐる平坦面をここでは帯郭と呼ぶ。以前の調査時点での観察によって台地北側

SD15
SD13
SD14
SD07
SD05
SD06
SD02
SD01
SD03
柱穴群
SD04
柱穴様落ち込み
SD17
SD16
SD09
SD11
SD08
SD12
SD10
SN01
59.2m
59.4m
59.8m
59.6m
59.4m
59.2m
59.0m
1トレンチ
2トレンチ
3トレンチ
4トレンチ
農道
帯郭
55m
50m
0
20m

第3図　遺構配置図


A
B
C
D
E
F
60m
SD07
SD02
市道
攪乱
樹根による攪乱
Ia　公園造成土
Ib　整地土
Ic　黒褐色土(10YR3/2)
Id　黒褐色土(10YR3/2)
II　黒褐色土(10YR3/2)
III　黒褐色土(10YR3/2)
IV　暗褐色土(10YR3/3)
大湯浮石
SD02覆土
1　褐色土(10YR4/4)
2　黒褐色土(10YR3/2)
3　黒褐色土(10YR3/2)
4　黒褐色土(10YR3/3)
5　黒色土(10YR4/3)
6　褐色土(10YR4/4)
7　暗褐色土(10YR3/3)
8　にぶい黄褐色土(10YR7/4)
SD07覆土
1　黒色土(7.5YR3/4)
0
2 m

第４図　調査区土層図



Ⅰa　公園造成土
Ⅲ　黒褐色土(10YR⅔)
1　黒褐色土(7.5YR⅔)
2　黒　色　土(7.5YR1⅞)
3　黒　色　土(7.5YR⅔)
4　黒　色　土(7.5YR⅔)
5　黒褐色土(7.5YR⅔)
6　黒褐色土(7.5YR⅔)
7　黒褐色土(10YR⅔)
8　黒褐色土(10YR⅔)
9　黒褐色土(10YR⅔)
10　黒褐色土(7.5YR⅔)
11　黒褐色土(7.5YR⅔)
12　黒褐色土(10YR⅔)
13　黒褐色土(10YR⅔)
14　黒　色　土(7.5YR⅔)
15　黒褐色土(10YR⅔)
16　黒　色　土(7.5YR1⅞)
17　黒褐色土(10YR⅔)
18　明黄褐色土(10YR⅔)
19　褐　色　土(10YR⅔)
20　にぶい黄褐色砂質土(10YR⅔)
21　黒　色　土(7.5YR1⅞)
22　明黄褐色砂質土(10YR⅝)
23　にぶい黄橙色粘土(10YR⅝)
24　黒褐色土(10YR⅔)
25　黒褐色土(10YR⅔)
26　明黄褐色土(10YR⅔)・黒色土(7.5YR1⅞)
27　黒　色　土(7.5YR1⅞)
28　黒褐色土(7.5YR⅔)
29　明黄褐色土(10YR⅝)
30　明黄褐色土(10YR⅔)・褐色土(10YR⅔)
31a　黒褐色シルト質土(7.5YR⅔)
31b　明黄褐色浮石(10YR⅔)
31c　にぶい黄褐色シルト質土(10YR⅔)
31d　暗褐色土(10YR⅜)
32　明褐色土(7.5YR⅔)
33　明黄褐色砂質土(10YR⅔)
34　褐　色　土(7.5YR⅔)
35　明褐色土(7.5YR⅔)・黒褐色土(10YR⅔)
36　明褐色砂質土(7.5YR⅔)
37　黒褐色土(7.5YR⅔)
38　黒褐色土(7.5YR⅜)
39　明黄褐色土(10YR⅝)・暗褐色土(10YR⅜)
40　黒褐色土(7.5YR⅔)
41　暗褐色土(10YR⅜)
42　明黄褐色砂質土(10YR⅝)
43　黒褐色土(7.5YR⅜)
44　褐　色　土(10YR⅔)
45　にぶい黄褐色粘質土(10YR⅝)
46　黄橙色砂質土(7.5YR⅝)
47　黒褐色土(7.5YR⅜)・明黄褐色砂質土(10YR⅝)
48　黒褐色土(7.5YR⅔)
49　黒褐色土(7.5YR⅔)
50　黒褐色土(7.5YR⅔)
51　黒　色　土(10YR1⅞)
52　黒　色　土(10YR1⅞)
53　明黄褐色火山灰(10YR⅞)
54　黒褐色土(10YR⅔)
55　黒　色　土(7.5YR1⅞)
56　暗褐色土(10YR⅜)
57　明黄褐色砂質土(10YR⅝)
58　暗褐色土(10YR⅜)
59　にぶい黄褐色土(10YR⅜)
60　にぶい黄褐色土(10YR⅜)・黒褐色土(10YR⅜)
61　にぶい黄橙色土(10YR⅜)
62　にぶい黄褐色土(10YR⅜)

第５図　北東斜面(３トレンチ)土層図

を除き斜面両側に存在したことが確認されている。今回の調査では、調査区北東側の道路工事範囲内の斜面にトレンチを４本入れ（１トレンチ～４トレンチ）、土層堆積状況を検討するとともに、現地表面の平板実測を実施した。

帯郭は工事範囲周辺では郭面からの比高差６～８ｍ前後の台地斜面中位に存在し、舌状台地東側を画する開析谷の谷頭部で終わっている。この谷頭部には台地上面から農道が形成され、帯郭につながっている。平坦面は幅2.5～4.0ｍ前後、標高52～54ｍ前後を測り、先の開析谷谷頭部から北に向かってゆるやかに下っている。現状では工事範囲から13ｍ前後北側で消失しており、それよりも北側については、雑木のため帯郭の存在は確認できなかった。帯郭の北半の山際には幅1.5ｍ前後、深さ35～70㎝前後の溝が存在し、４トレンチの土層断面の観察から、現在は既に埋没しているが、帯郭南側にもかつて存在していたことが認められる。その掘り込み面は現代の表土層直下であり、覆土はシルトもしくはシルト質土を主体とし、流水もしくは帯水下での堆積と考えられる。これらのことから本溝は、谷頭部からの農道に伴う近現代の排水溝と考えられ、城館に本来伴うものではないと思われる。

３トレンチの土層（第５図）を見ると、帯郭の下位層（50～62層）は比較的均質なクロボク土もしくは台地基層のシラスの再堆積土を主体とし、基本的に自然堆積土と考えられる。50層の上面がほぼ水平であることから、帯郭の形成は、一部当時の地表面を平坦に整地し、さらにその上に地山土（44～46層）などを盛って行ったものと考えられる。盛土層には版築状の堆積は認められない。43層が均質で自然堆積とみられるクロボク土で、ほぼ水平に堆積すること、その上層の42層が細砂～微砂から成り、流水下の堆積とみられることから本層上面が帯郭形成後の地表面と考えられる。

帯郭形成後には、上方からのクロボク土と地山土とが混在する斜面崩壊土が厚さ50㎝前後堆積している（32～41層）。その後、先述した排水溝が掘り込まれており、その覆土が31ａ～ｄ層である。

以上の今回の調査結果から、帯郭は本調査区内では城館の施設として形成された後、上方からの崩壊土等によってその高さを増し、近現代には農道の一部として利用されたことが窺われる。

（２）空堀

今回の調査においては、北向きの舌状台地の基部を東西に区画する２条の空堀ＳＤ01・02の東半部分を調査区北端の地山上面で確認した。1972・73年の発掘調査の時点には２条の空堀の両側とその間に存在していた３条の土塁は既に削平され、消失していた。

ＳＤ01（第６・７図、図版４・５・７）

本空堀は２条の平行する空堀のうちの北側のもので、南側のＳＤ02との間隔は４ｍ前後を測

る。検出長はおよそ26ｍで、確認面での幅は3.2ｍ前後を測る。確認面からの深さは95㎝前後で、深さはほぼ一定であるが西端部では深さ35～40㎝前後と浅くなっている。横断面形は横長の「Ｖ」字形をなし、薬研堀の一種とみられる。覆土はその推積要因から、1973年の発掘調査以後の整地に際して埋め戻された層群（第７図Ａ－Ｂ断面１・２層：以下Ａ１・２層のように略述する、Ｃ１・２層）、土塁の崩壊土を主体とする層群（Ａ３～７層、Ｃ３～６層）、堀がある程度開口していた段階に周囲から流入した層群（Ａ８・９層、Ｃ７・８・10層）、堀の最下底に堆積した層群（A10・11層、Ｃ12層）および壁の崩壊土を主体とした層群（A12～14層、Ｃ９・11層）とにまとめることができる。このうち土塁の崩壊土を主体とする層群は空堀の掘削土とみられる灰白色あるいはにぶい黄橙色の地山土と黒色もしくは黒褐色土とが混在しており、比較的短期間のうちに堆積したものとみられる。また、空堀の最下底に堆積している層群はシルト質土もしくはシルト質粘土で、ある程度の帯水状況下での堆積と考えられる。このことから、本空堀はある程度帯水した場合も存在したことが想定される。

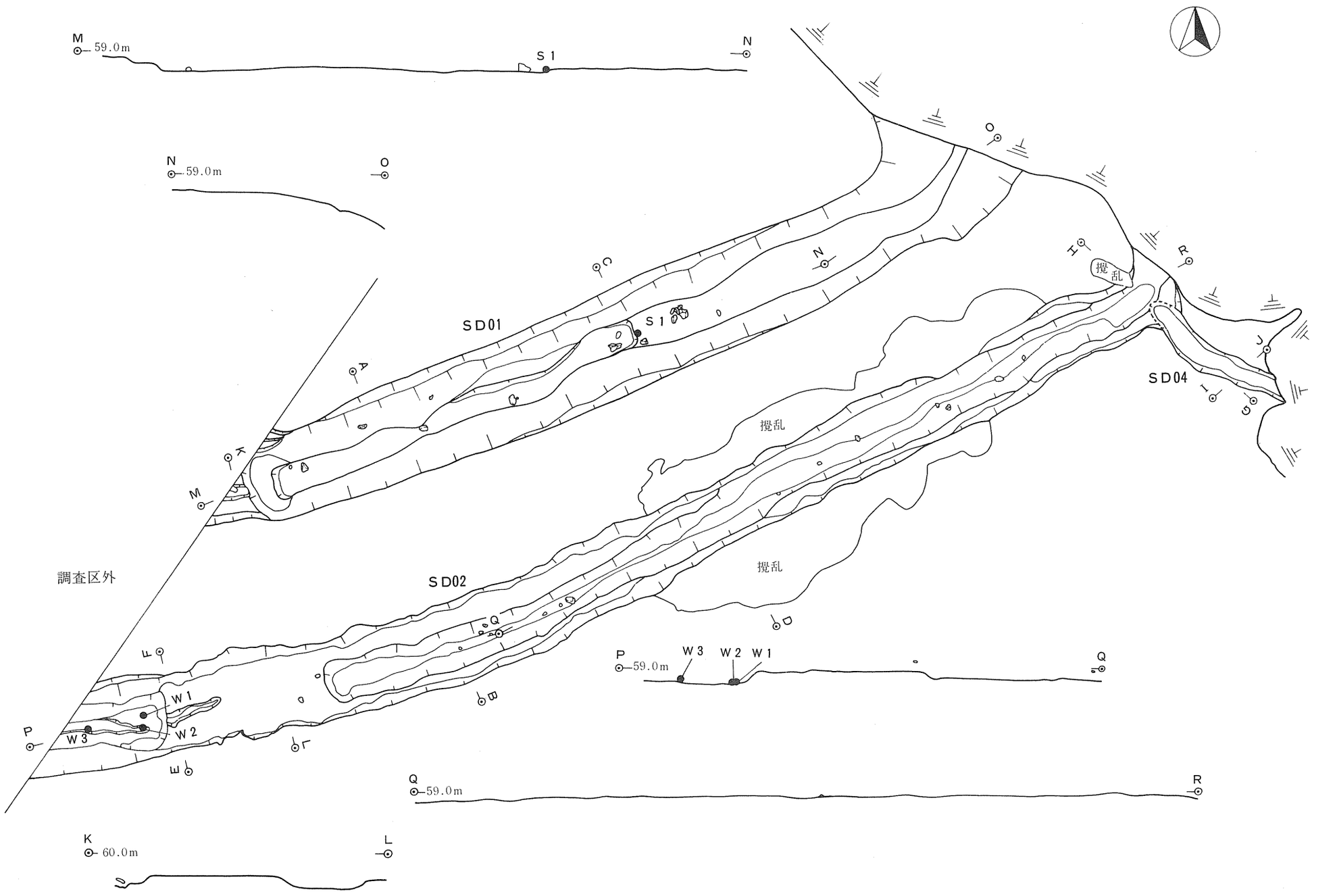
本空堀からの出土遺物には磁器破片１点と砥石１点がある（第８図、図版12）。１は瀬戸美濃系かと推定される色絵椀の口縁部破片である。外面に毛筆による１条の絵付の痕跡が認められ、上端がかすかに淡赤褐色に発色している。明治から大正頃の所産である。空堀底部付近からの出土の可能性があるが、確実ではない。Ｓ１は砂質凝灰岩製の砥石である。図下側を欠損する。両面が使用されている。本例は堀底面近くからの出土である。

ＳＤ02（第６・７図、図版４・６・７）

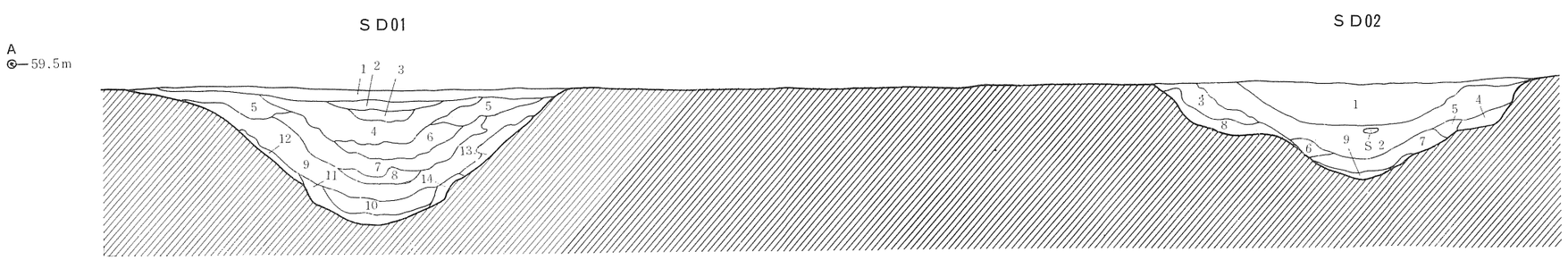
本空堀はＳＤ01の南側で検出した。検出長はおよそ39ｍ前後で、北東端では溝ＳＤ04に切られている。確認面での幅2.4～3.0ｍを測る。確認面からの深さ60～70㎝を測るが、西南側には長さ5.2ｍ前後にわたって、ＳＤ01と同様に深さ30㎝前後に浅く平坦に掘り残した部分がある。さらにこの平坦面は北東側の両壁に幅25～60㎝前後で犬走となって続いており、これらの部分ではその横断面形は両側に段のある幅広の「Ｖ」字形を呈している。

覆土は大きくは上層（Ａ１～３層、Ｃ１・２層）と下層（Ａ４～９層、Ｃ３～６層）とに大別できる。上層は1973年以降の整地に伴う埋め戻し土であり、下層は周囲からの自然堆積層である。下層のうち最下層（Ａ９層、Ｃ５・６層）はシルト質（粘）土や粘質土で、ＳＤ01と同様帯水下の堆積と考えられる。

本空堀からの出土遺物には磁器破片、木製品がある（第８図、図版12）。２は瀬戸美濃系かと推定される染付小皿である。見込部には銅版転写による花文や同心円文、矩形文がある。高台の両脇には同心円文が描かれる。３も瀬戸美濃系かと推定される色絵小坏である。見込部には赤褐色・茶褐色・緑色などの絵具による鹿文が絵付けされる。畳付は無釉である。以上の磁器はともに覆土最上位の埋め戻し土からの出土で、明治～大正頃のものと思われる。

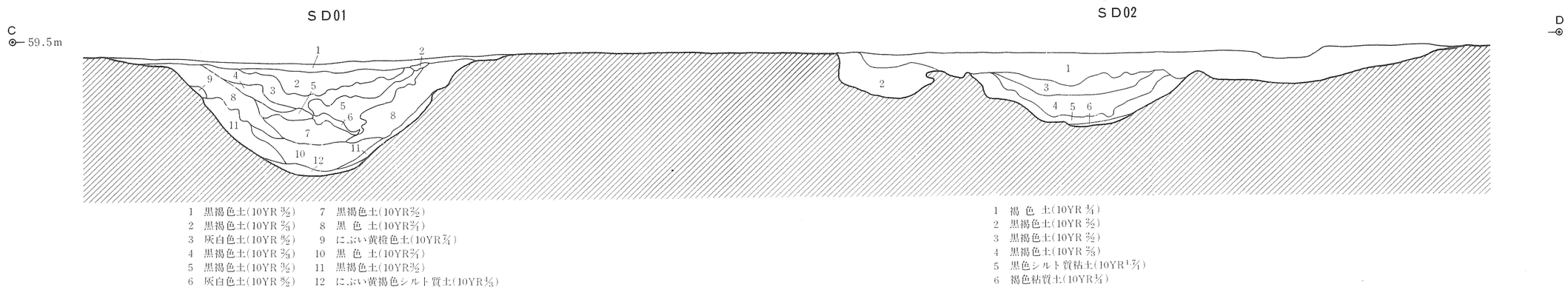


第6図　空堀SD01・02、溝SD04



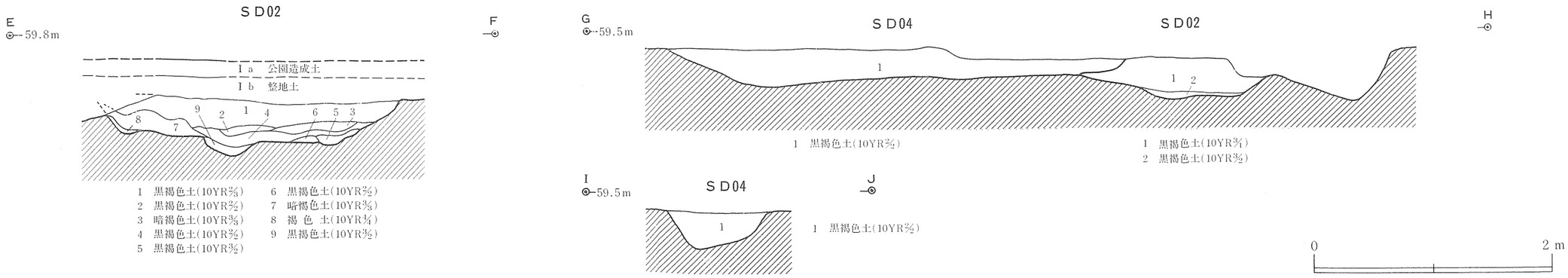
1　黒褐色土(7.5YR2/2)　　8　黒褐色土(7.5YR2/2)
2　黒　色　土(7.5YR2/1)　　9　黒　色　土(10YR2/1)
3　黒褐色土(10YR2/2)　　10　黒色シルト質粘土(10YR1 7/1)
4　黒　色　土(7.5YR2/1)　　11　にぶい黄褐色シルト質土(10YR4/3)
5　黒褐色土(10YR3/2)　　12　黒褐色土(10YR3/3)
6　黒褐色土(10YR3/2)　　13　黒褐色土(10YR3/2)
7　黒褐色土(10YR3/3)　　14　黒　色　土(10YR2/1)

1　黒褐色土(10YR3/3)　　6　黒　色　土(10YR 2/1)
2　黒褐色土(10YR3/2)　　7　黒　色　土(10YR 1 7/1)
3　灰白色土(10YR8/2)　　8　黒褐色土(10YR 3/2)
4　黒褐色土(10YR3/2)　　9　灰黄褐色シルト質土(10YR4/2)
5　黒　色　土(10YR2/1)



1　黒褐色土(10YR 3/2)　　7　黒褐色土(10YR3/2)
2　黒褐色土(10YR 3/3)　　8　黒　色　土(10YR2/1)
3　灰白色土(10YR 8/2)　　9　にぶい黄橙色土(10YR7/4)
4　黒褐色土(10YR 3/3)　　10　黒　色　土(10YR2/1)
5　黒褐色土(10YR 3/2)　　11　黒褐色土(10YR3/2)
6　灰白色土(10YR 8/2)　　12　にぶい黄褐色シルト質土(10YR4/3)

1　褐　色　土(10YR 4/4)
2　黒褐色土(10YR 3/2)
3　黒褐色土(10YR 3/2)
4　黒褐色土(10YR 3/3)
5　黒色シルト質粘土(10YR1 7/1)
6　褐色粘質土(10YR4/4)



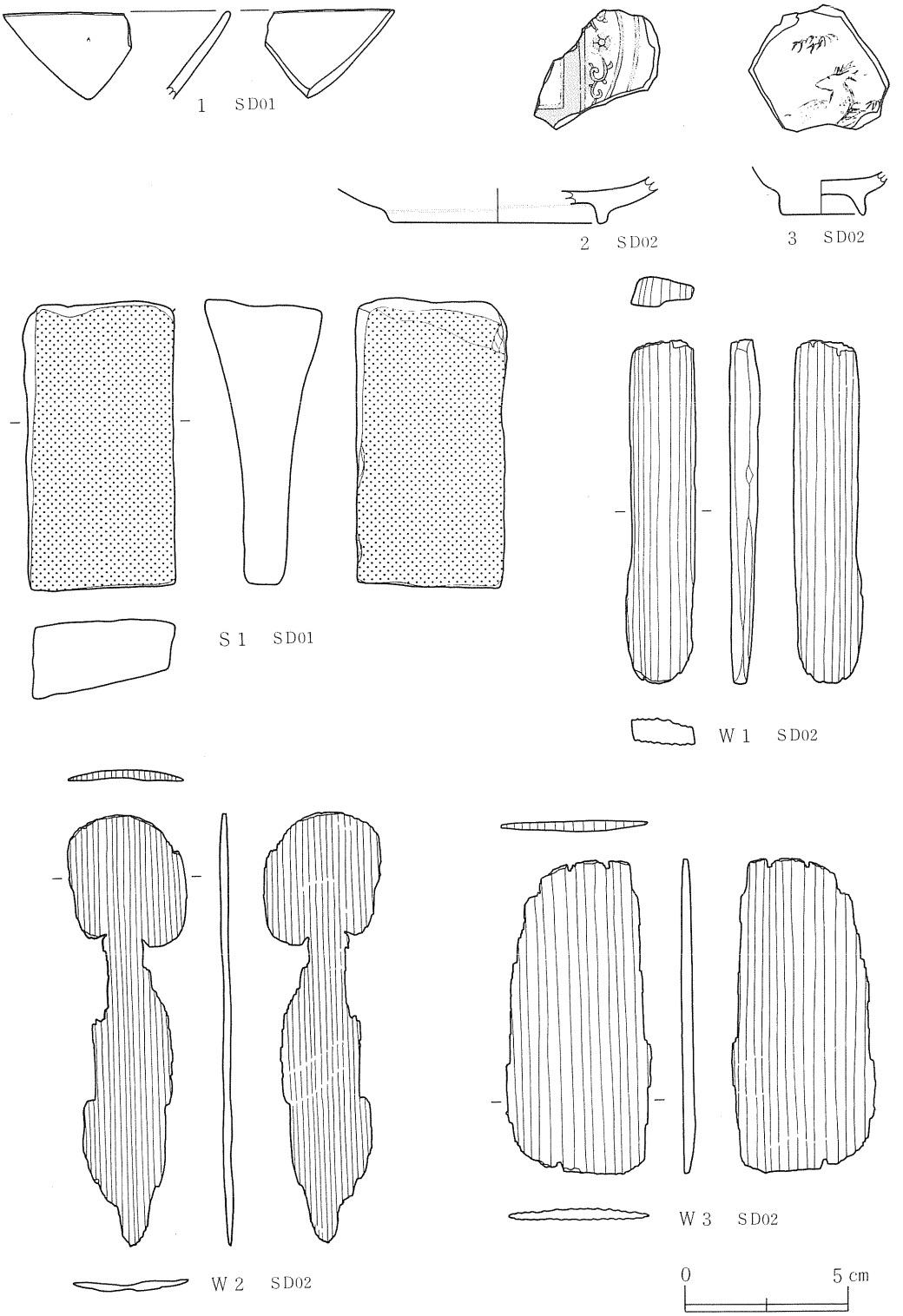
1　黒褐色土(10YR3/4)　　6　黒褐色土(10YR3/2)
2　黒褐色土(10YR3/2)　　7　暗褐色土(10YR3/3)
3　暗褐色土(10YR3/4)　　8　褐　色　土(10YR4/4)
4　黒褐色土(10YR3/2)　　9　黒褐色土(10YR3/2)
5　黒褐色土(10YR3/2)

1　黒褐色土(10YR3/2)

1　黒褐色土(10YR3/4)
2　黒褐色土(10YR3/2)

1　黒褐色土(10YR3/2)

第７図　空堀ＳＤ01・02、溝ＳＤ04土層断面



第8図　空堀SD01・02出土遺物

Ｗ１～３は空堀西端部の底面直上で検出した板材である。Ｗ１は棒状を呈する板材で、現状で長さ10.5cm、幅2.0cm、厚さ0.8cmを測る。両側面は面取りされており、上下端は欠損する。Ｗ２・３は周縁を欠損するが、現状で前者は長さ13.2cm、幅3.6cm、厚さ0.2cm、後者は長さ9.6cm、幅4.3cm、厚さ0.3cmを測り、ともに極めて薄い板材である。これらの板材の木取りはいずれも柾目取りである。これらの具体的な用途は不明であるが、後述する郭への出入口部に隣接して出土していることから、例えば門の屋根葺材といった出入口部施設の建築部材の一部であった可能性も考慮すべきかもしれない。

以上のほかにこれらの空堀からは径20～40cm前後の亜角礫が若干出土しているが、加工痕は認められず、その性格は不明である。

今回の調査区の北西端で検出したＳＤ02およびＳＤ01の浅く堀り残した部分は、舌状台地長軸に沿って一直線に並び、舌状台地基部のほぼ中央に位置している。このことからこの浅く堀り残した部分は郭への出入口部に当たるものと考えられる。さらにこれらの部分は公園造成以前に存在した台地を南北に走る農道上に位置するものと推定される。この旧農道の存在から、本城館築造当初からこの部分には土塁は構築されなかったものと想定でき、門のような施設が存在した可能性が考えられる。ＳＤ02の平坦面には、西半中央に空堀に平行に走る長さ180cm、幅30cm、深さ12cm前後の溝が存在する。出入口の施設の一部の可能性があるが、その具体的な性格は不明である。このほかに出入口部周辺には関連する遺構は確認できず、この出入口部の具体的な構造は不明である。

（３）柱穴群（第９図、図版８）

空堀ＳＤ01の北側で計46基の柱穴を地山面で検出した。個々の柱穴の形態等については第２表にまとめた。現状では掘立柱建物跡や柵列などの規則的な配列を確認できない。また、1972・73年の調査で確認された掘立柱建物跡の柱穴の深さが20～30cm前後であるのに対し、今回の柱穴群の確認面から底面までの深さは一部のものを除き20cm未満で、総体的に浅いこと、柱痕跡がいずれの柱穴にも確認できないこと、柱穴の検出範囲と公園造成範囲とがほぼ対応し、柱穴が本来土塁が存在したＳＤ01北隣にも存在することなどから、城館に伴う柱穴でないものも存在すると考えられる。

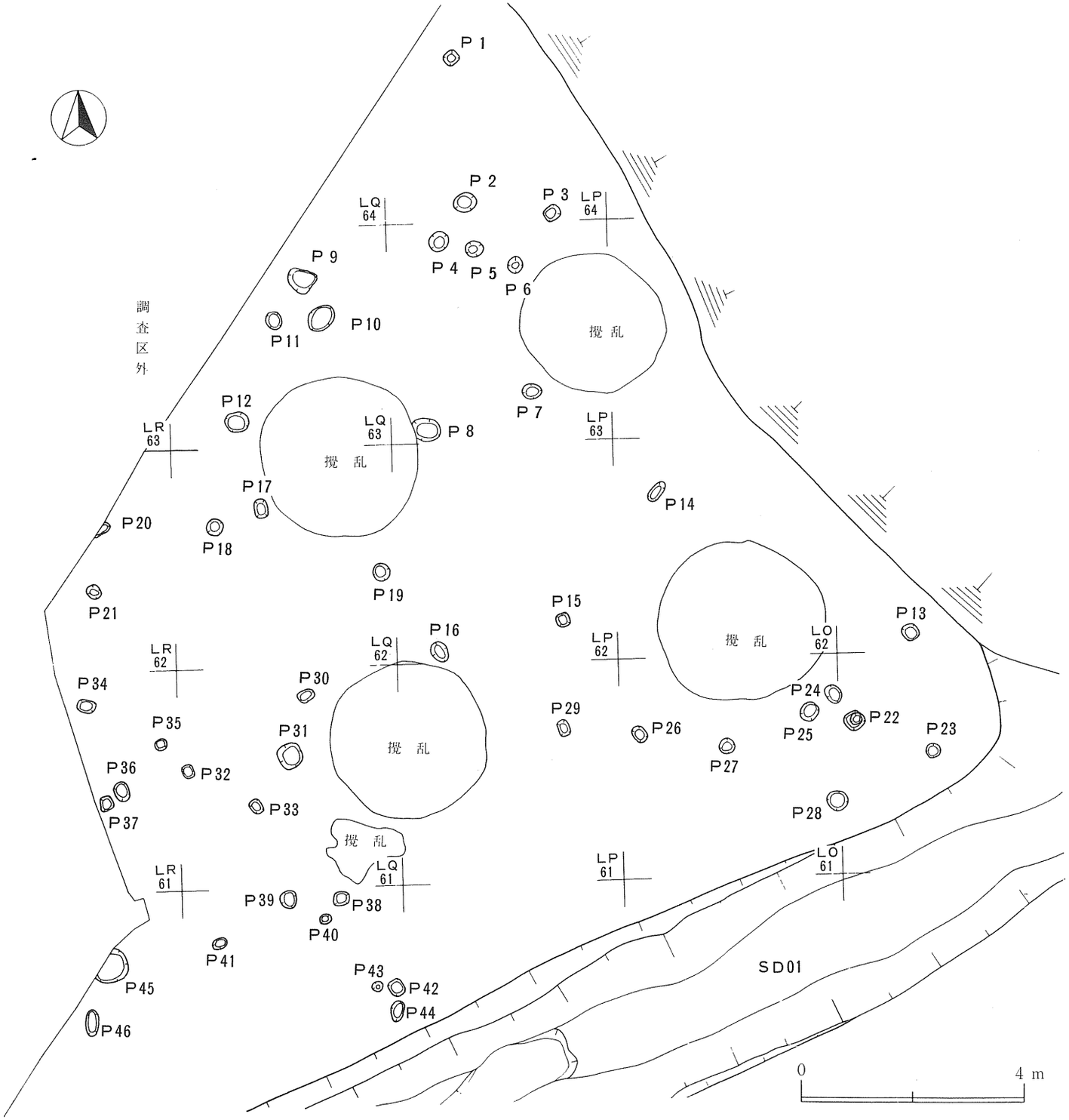
２　時期不明の遺構

（１）溝

今回の調査において溝としたものは15条を数える。これらは規模・形態等が多様であり、その性格も一様ではない。

ＳＤ03（第10図、図版８）

調査区北西端で検出した。台地縁にほぼ平行して走り、北西端側は調査区外に及び、南東側


P 1
P 2
P 3
LQ 64
LP 64
P 4
P 5
P 6
P 9
P 10
P 11
調査区外
攪乱
P 7
P 12
LQ 63
P 8
LR 63
LP 63
P 17
P 14
P 20
P 18
P 19
P 21
P 15
P 13
P 16
LQ 62
LP 62
LO 62
LR 62
P 30
P 34
P 24
P 29
P 22
P 35
P 31
P 26
P 25
P 23
P 36
P 32
P 27
P 33
P 28
P 37
LQ 61
LP 61
LO 61
LR 61
P 39
P 38
P 40
P 41
P 43
P 42
P 45
P 44
P 46
SD01
0
4 m

第９図　柱穴群平面図

番号	平面形	長さ cm	幅 cm	深さ cm	柱痕跡の有無	備考	番号	平面形	長さ cm	幅 cm	深さ cm	柱痕跡の有無	備考
P1	正方形	23	23	28	無		P24	円形	28	27	9	無	
P2	円形	32	30	23	無		P25	円形	28	27	22	無	
P3	正方形	30	26	41	無		P26	円形	29	26	16	無	
P4	円形	30	28	15	無		P27	円形	20	20	6	無	
P5	円形	26	22	16	無		P28	円形	30	28	16	無	
P6	円形	22	20	19	無		P29	長方形	25	17	16	無	
P7	楕円形	27	23	10	無		P30	長方形	23	17	10	無	
P8	楕円形	40	31	13	無		P31	正方形	23	17	10	無	
P9	不整楕円形	52	41	15	無		P32	正方形	22	18	22	無	
P10	楕円形	56	40	13	無		P33	長方形	24	22	48	無	
P11	円形	30	27	14	無		P34	正方形	23	20	13	無	
P12	楕円形	36	32	11	無		P35	円形	20	20	6	無	
P13	正方形	26	24	15	無		P36	円形	24	21	12	無	
P14	長方形	26	16	12	無		P37	不整正方形	22	19	20	無	
P15	正方形	23	22	19	無		P38	正方形	22	20	14	無	
P16	楕円形	38	27	7	無		P39	楕円形	30	23	13	無	
P17	長方形	26	20	11	無		P40	円形	16	15	14	無	
P18	円形	25	23	16	無		P41	楕円形	28	18	30	無	
P19	円形	30	28	18	無		P42	正方形	28	25	17	無	
P20	円形？	31	(16)	22	無		P43	円形	18	16	7	無	
P21	正方形	23	22	21	無		P44	楕円形	30	21	13	無	
P22	正方形	24	24	46	無	底面段有	P45	円形	50	(43)	15	無	
P23	円形	23	23	22	無		P46	楕円形	28	26	16	無	

第2表　柱穴群一覧表

は現代の攪乱によって壊されている。現状では確認長4.8ｍ、幅20～50㎝前後を測り、確認面からの深さは８～10㎝前後と浅く、底面は不整である。覆土はしまりが弱く、１ｂ層のクロボク土と地山土のにぶい黄褐色粘質土（10YR5/3）とが混在したもので、埋め戻し土の可能性がある。覆土中からの遺物の出土はない。覆土はしまりが弱く、埋め戻し土とみられることから、近現代の何らかの区画のための溝かと推定される。

ＳＤ04（第６・７図、図版８）

調査区北東部で確認した。空掘ＳＤ02の北東端部を一部切っている。確認長は5.4ｍ前後で、やや湾曲しながら北西－南東方向に延びている。幅85㎝前後、確認面からの深さ25～30㎝を測る。覆土はⅢ層起源とみられるクロボク土である。覆土中からの出土遺物はなく、その時期および性格は不明である。

ＳＤ05（第10図、図版９）

ＭＡ55・56区に位置する。ＳＤ06に切られている。ほぼ北－南方向に延び、確認長約４ｍである。幅は50㎝、確認面からの深さ６～10㎝を測る。覆土は比較的しまりが強い。遺物の出土はない。本溝は、空堀ＳＤ02の出入口部に比較的接近して位置することから、空堀出入口部に関連する遺構の可能性もあるが、本溝以外に周辺には関連する可能性ある遺構が認められず、現状ではその性格・時期は不明である。

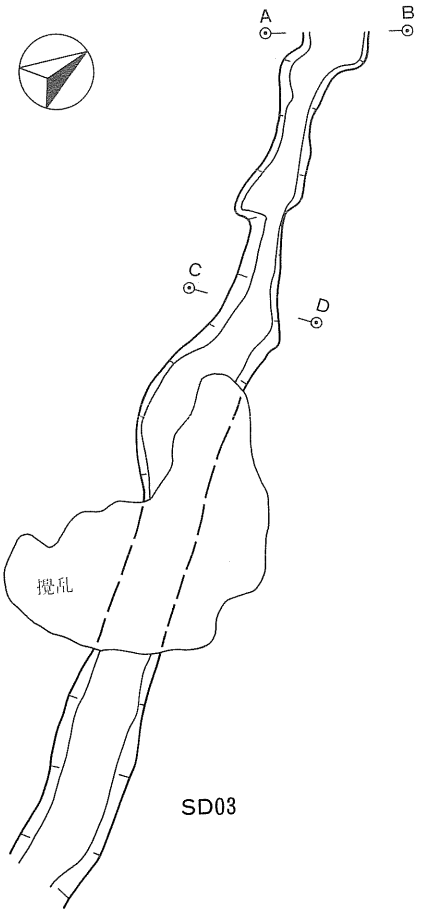
ＳＤ06（第10図、図版９）

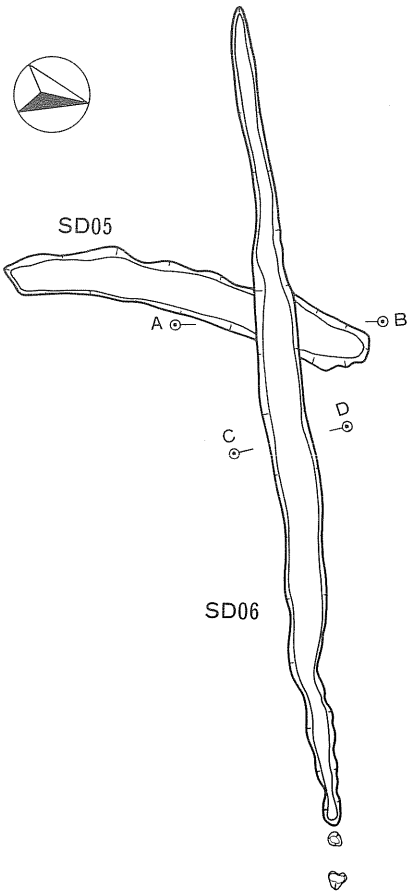
ＬＴ・ＭＡ55・56区に位置し、ＳＤ05を切る。北東－南西方向に走り、ＳＤ02にほぼ平行する。南西端は調査区外に延びるが、現状で長さ88㎝前後を測る。幅は44㎝、確認面からの深さ10㎝前後である。覆土はしまりが弱く、地山土を若干混在する。覆土からの遺物の出土はない。その覆土の特徴と溝の走向から、本溝は恐らく公園の区画の溝と推定される。

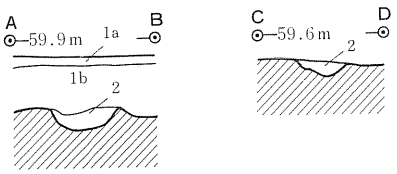
ＳＤ07（第11図、図版９）

調査区南西部に位置する。西半部は調査区外に延び、東半部のみの検出であるが、北東－南西辺長が25ｍ前後の方形にめぐるものと推定される。溝は幅60～70㎝、地山面からの深さ40㎝前後を測るが、本来の掘り込み面はⅡ層上面とみられる。横断面形は「Ｕ」字形を呈する。覆土は底面直上の層とその上位の層とに大きく分かれる。前者は帯水下での堆積とみられる粘質土であり、後者はⅡ層起源の流入土とみられる。覆土からの出土遺物はない。

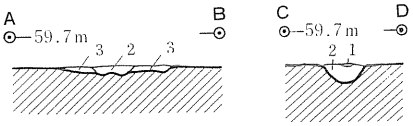
本溝は範囲確認調査の時点で一部確認され、当初は館に伴う可能性が想定されていた。しかしながら、調査区北西部の空堀と本溝の間には該期の遺構・遺物が認められないこと、本溝の走向が空堀のそれとは対応せず、現代の排水路のそれと対応することから、本溝は城館よりも後出で、近現代に属するものと考えられる。本溝は上述のように現代排水路とその走向は対応するものの、それに切られており、現在の宅地の地割とも方向自体は対応するが、完全には一



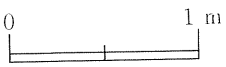


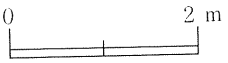


1a　黒褐色土（7.5YR3/2）
1b　黒褐色土（10YR3/2）
2　黒褐色土（10YR3/2）



SD06覆土　1　暗褐色砂質土（10YR3/3）
SD06覆土　2　黒褐色土（10YR3/2）
SD05覆土　3　暗褐色土（10YR3/3）





第10図　溝SD03・05・06

致しないことから、現在の地割が成立する直前の所産と考えられる。溝の内部には関連する遺構が現状では認められないことから、畑等の耕作地の区割りの溝であった可能性があろう。

ＳＤ08・09・10・11・12（第12図、図版10）

これらの溝は調査区東南部でまとまって確認した。その走向が大勢として東西方向を向き、覆土の状況等も類似することから、一連のものととらえ、ここでは一括して扱う。

これらの溝は地山面での幅15～20cm前後を測る。確認長は45～560cmと一様でないが、地山面からの深さが２～３cm前後と浅く、ＳＤ08・11には長軸の延長線上にも溝の一部とみられる浅い落ち込みが存在することから、これらの溝は本来地山面よりも上位から掘り込まれていたものと考えられる。各溝の間隔は50～70cm前後である。覆土は耕作土であるⅡ層起源のものと思われ、しまりは弱い。横断面形は浅い「Ｕ」字形である。覆土からの遺物の出土はない。

これらの溝の時期・性格は不明であるが、覆土の特徴から近現代に属するものと推定され、何らかの耕作に伴う遺構の可能性が考えられるが、確実ではない。

ＳＤ13・14・15（第13図、図版10）

これらの溝は調査区南西部で隣接して確認した。各溝は平行もしくは平行に近く、いずれも現代の排水路に取りついて終わっており、ここではまとめて取り扱う。

これらの溝はＳＤ15がやや北西－南東方向に振れるが、他の２条の溝はほぼ東西方向に走る。いずれも西側は調査区外へ延び、東端は現代の排水路に取りついている。

ＳＤ13は確認長2.5ｍ、ＳＤ14は同3.0ｍ、ＳＤ15は同3.4ｍを測る。幅は25～60cm前後、地山面からの深さ15～20cmを測るが、平面形・断面形とも不整である。覆土はⅡ層の耕作土起源のものが主体をなすとみられる。

３条の溝のうちＳＤ13は現代の宅地地割溝と対応し、他の溝も上述したように走向や現代排水路に取りつく状況に共通性が認められることから、これらの溝は現代の宅地区画と関連するものと考えられる。

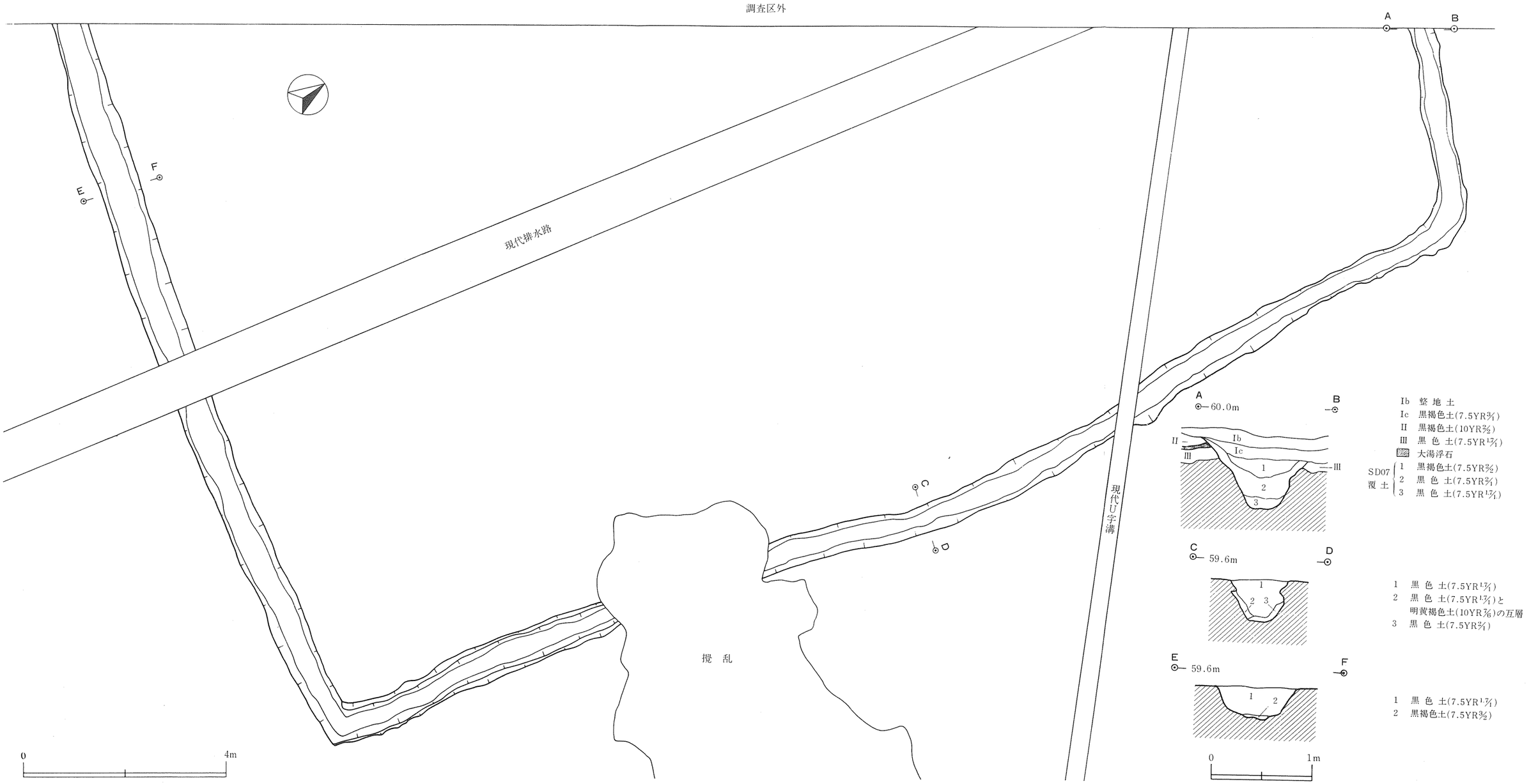
ＳＤ16・17（第13図、図版11）

これらの溝は調査区南端で北北東－南南西方向に平行して走る。長さはＳＤ16が約9.7ｍ、ＳＤ17が9.6ｍとほぼ等しい。幅は25～60cm前後、深さは深い部分で約30cm、浅い部分で約５cmを測り、平面形、断面形とも不整である。覆土はともにしまりが弱く、地山塊を多量に含む。これらの溝はその形態と覆土の特徴から、現代の耕作と関連する溝かと推定される。溝の走行方向が現代の排水路のそれとほぼ一致することも、この推定の傍証となる可能性があろう。

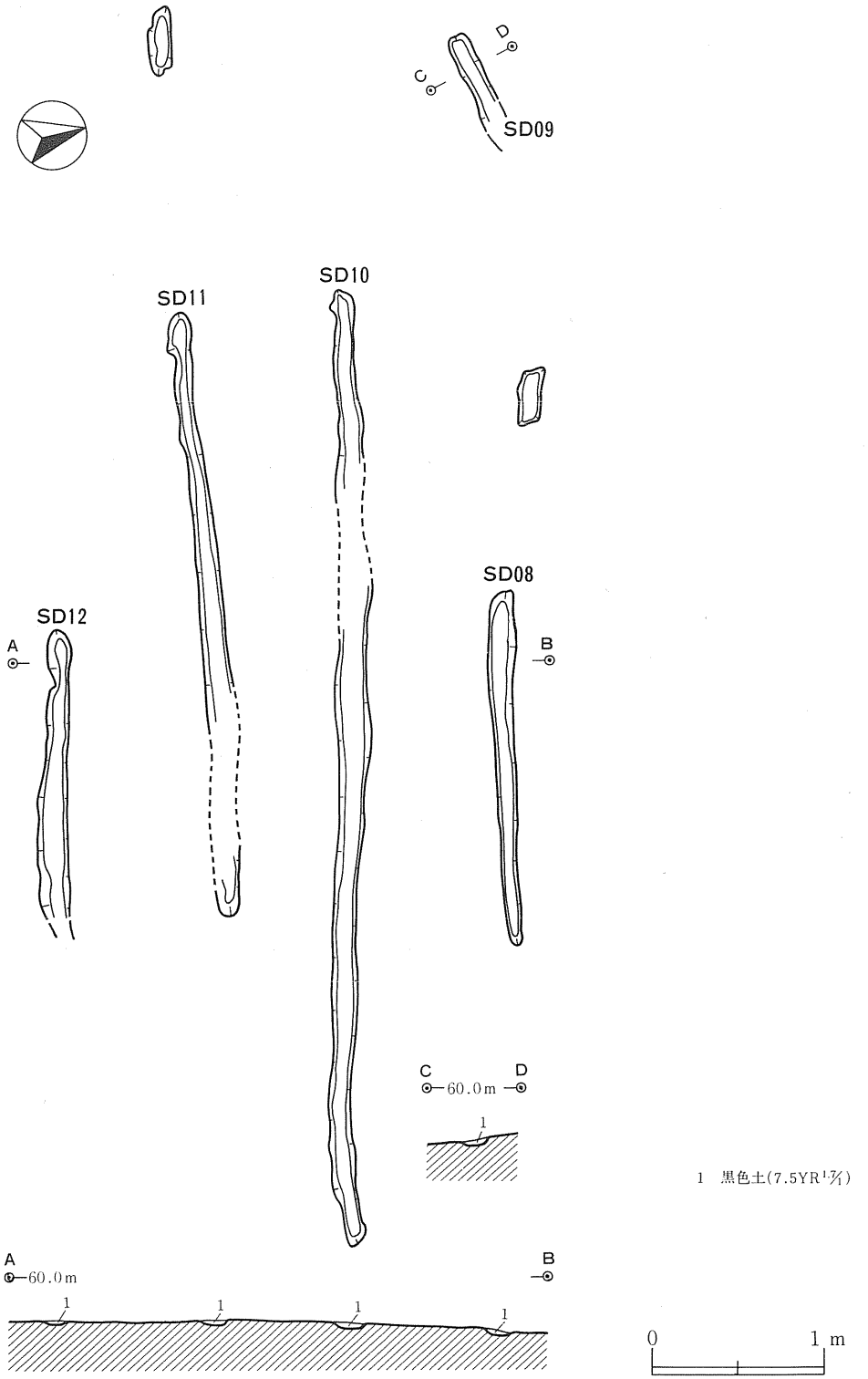
（２）焼土遺構

ＳＮ01（第14図、図版11）

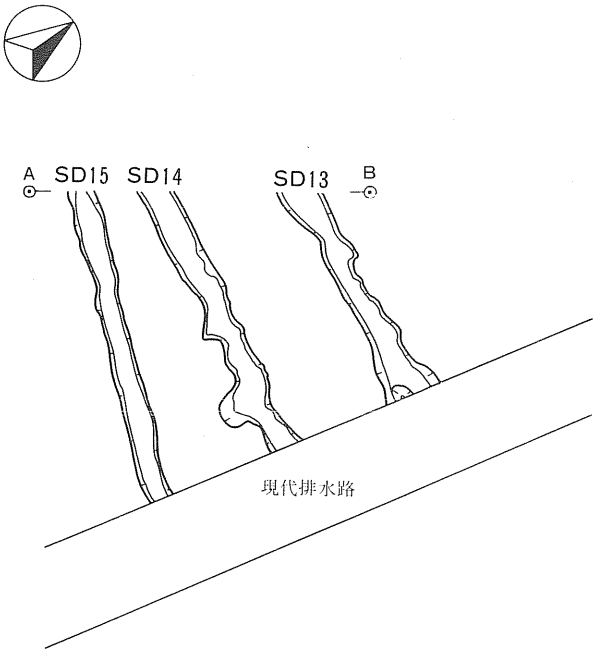
調査区南東端ＭＢ41区で確認した。平面形が108×72cmの楕円形で、地山面からの深さ６cm

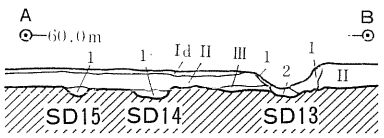

調査区外
現代排水路
現代U字溝
撹乱
A
B
C
D
E
F
0
4m
60.0m
59.6m
59.6m
0
1m
Ib 整地土
Ic 黒褐色土(7.5YR3/1)
II 黒褐色土(10YR2/2)
III 黒色土(7.5YR1.7/1)
大湯浮石
SD07 覆土
1 黒褐色土(7.5YR2/2)
2 黒色土(7.5YR2/1)
3 黒色土(7.5YR1.7/1)
1 黒色土(7.5YR1.7/1)
2 黒色土(7.5YR1.7/1)と明黄褐色土(10YR7/6)の互層
3 黒色土(7.5YR2/1)
1 黒色土(7.5YR1.7/1)
2 黒褐色土(7.5YR3/2)

第11図　溝SD07



第12図　溝SD08・09・10・11・12



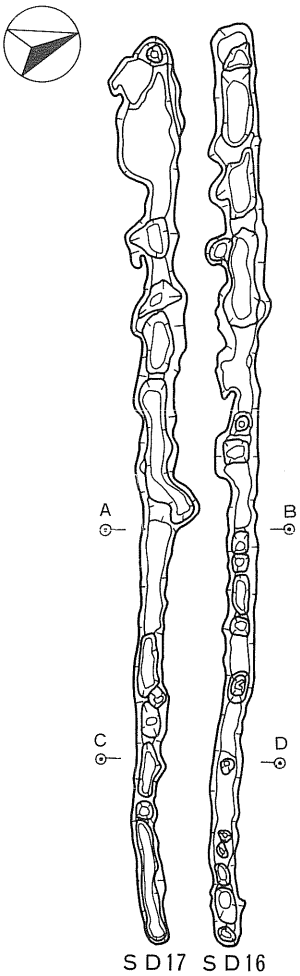


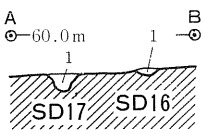
Id　暗褐色土(10YR3/3)
II　黒褐色土(10YR3/2)
III　黒褐色土(7.5YR3/2)

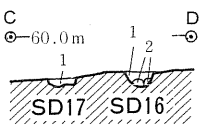
SD13
1　暗褐色土(10YR3/3)
2　黒褐色土(10YR3/2)

SD14
1　黒褐色土(7.5YR3/2)

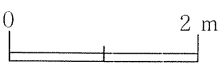
SD15
1　黒褐色土(10YR3/2)



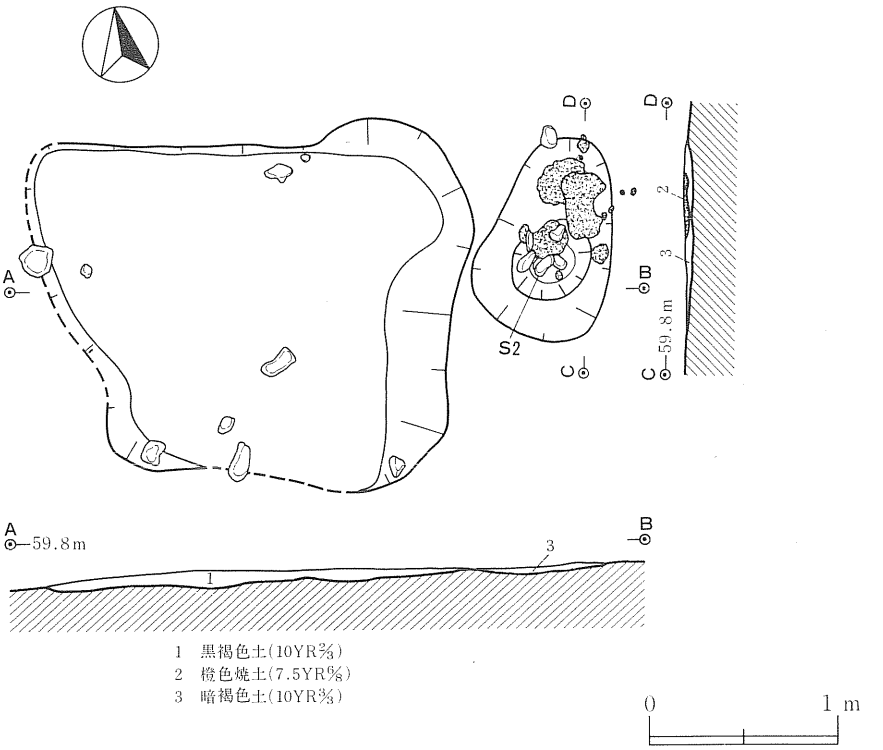




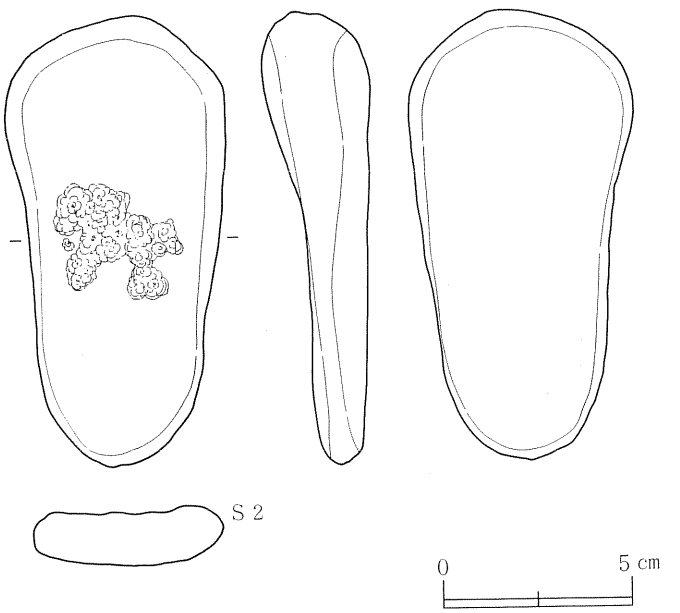
1　黒褐色土(10YR3/2)
2　にぶい黄褐色土(10YR5/4)



第13図　溝SD13・14・15・16・17



第14図　焼土遺構SN01



第15図　焼土遺構SN01出土遺物

前後の浅い土坑の覆土上面に、数個の円礫を伴って焼土が形成されている。この土坑の西隣には、削平が著しいが、2.2×2.0ｍ前後の不整方形の平面形を呈する掘り込みが存在する。両者は覆土が類似することから一連の遺構と判断した。焼土を伴う楕円形の土坑からは円礫にまざって凹石（第15図Ｓ２）が出土している。本例は焼土遺構形成時に円礫とともに周囲から集められたものとみられ、必ずしも時期特定の資料とはならない。他に出土遺物はなく、本遺構は縄文時代の所産である可能性があるが、確実ではない。また、本遺構は上位が大きく削平されており、その構造は明確ではなく、その性格も不明である。

（３）柱穴様落ち込み（第３図）

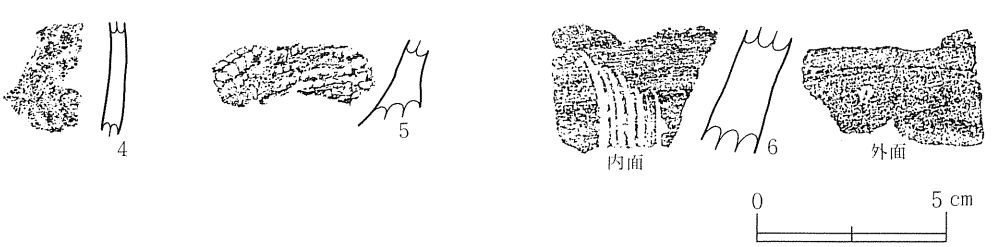
調査区南端部では計34基の柱穴様落ち込みを地山面で検出した。平面形は長さ20～30㎝の円、楕円または正方形をなし、確認面からの深さは10～15㎝前後のものが多いが、中には正方形の平面形で深さが30㎝を越すものもある。覆土はしまりがなく、地山塊を多量に含むものが一般的であり、柱痕跡は確認できない。ただし、先に触れた平面形が正方形で、深さ30㎝を越すものは柱穴であった可能性がある。これらを含めて、今回の調査範囲では明確な配列を認めることはできなかった。これらの柱穴様落ち込みは先に現代の耕作と関連する可能性あると推定したＳＤ16・17と覆土が類似し、多くは現代の耕作痕であった可能性が考えられる。

第３節　遺構外出土遺物

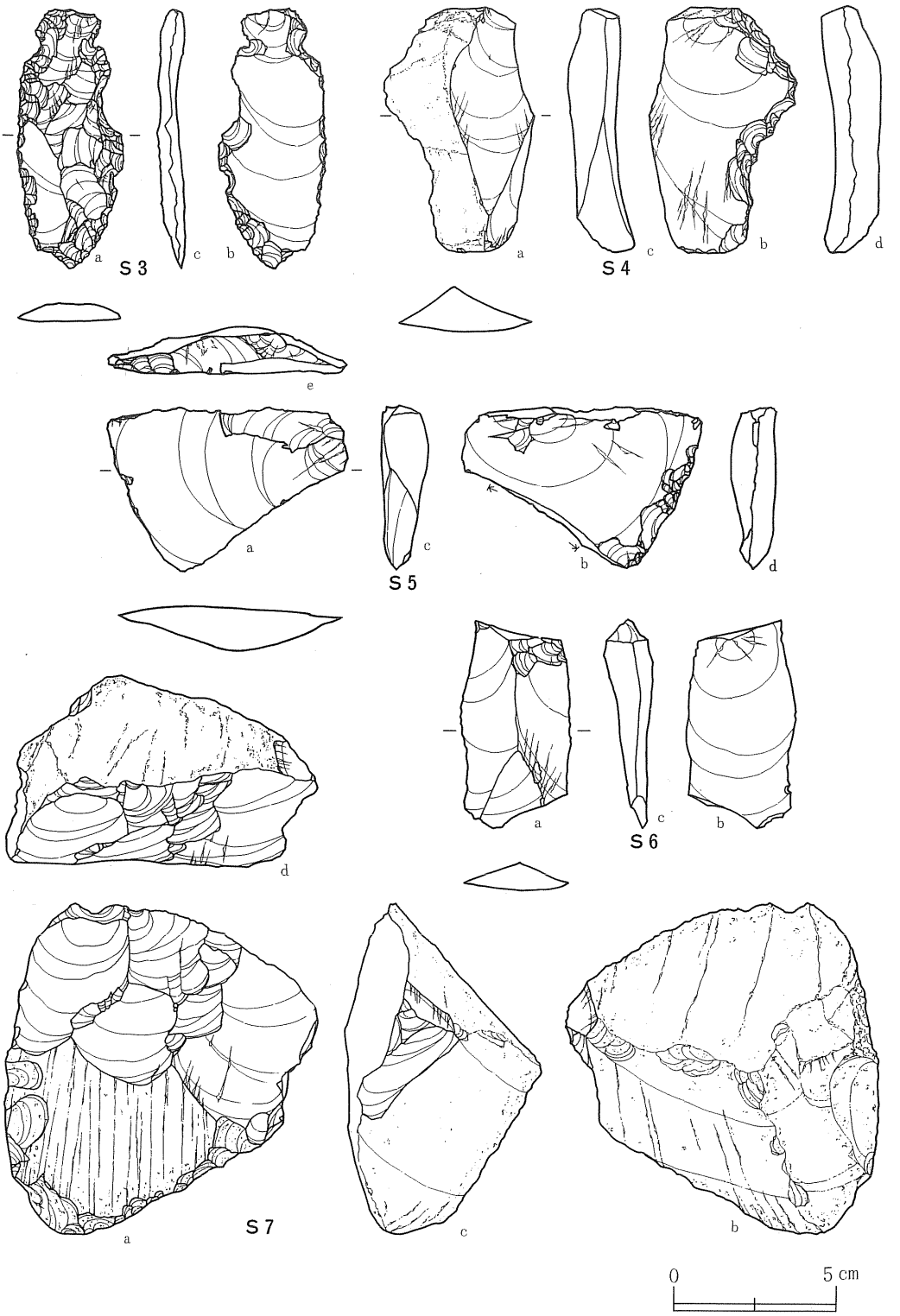
１　土器・陶器（第16図、図版13）

４・５はＬＴ45区の風倒木痕中から出土した同一個体の縄文土器破片である。４は摩滅が著しく、文様は不明である。５は底部附近の破片で、側面にはＬＲ縄文が斜行している。胎土中には石英・長石などの砂粒を含み、表面は褐灰色～浅黄橙色を呈し、内面は褐灰色をなし、焼成は比較的良好である。胎土・焼成の特徴からは縄文時代後期に属すると推定される。

６は珠洲系陶器の擂鉢破片である。北東斜面際のＬＫ60区表土層からの出土である。内面に７条のおろし目が認められる。内外面とも灰色を呈する。胎土には細砂粒を若干含み、焼成は



第16図　遺構外出土土器・陶器



第17図　遺構外出土石器

良好である。おろし目の形態から14世紀ころの所産と考えられるが[註1]、小破片のため確実ではない。

2　石器（第17図、図版13）

S 3は調査区北東側の斜面に設定した2トレンチで検出した縦型石匙である。出土層は大湯浮石を混在したクロボク土であり、本来台地上面に存在した遺物包含層が斜面に二次堆積したものとみられる。

本例は平坦打面をもつ縦長剥片を素材とし、打面側につまみ部を作出している。二次加工は両面に施されるが、a面右縁とb面左縁のそれは比較的大形で、a面左縁とb面右縁は細かい。頁岩製である。

S 4は自然面打面をもつ縦長剥片の主要剥離面側の一側縁に二次加工が加えられ、刃部が作出されたスクレイパーである。背面左側には自然面を残し、右側の2枚の先行剥離面の剥離方向は主要剥離面のそれとほぼ同一である。頁岩製でMA51区からの出土である。

S 5は調整打面をもつ横長剥片の主要剥離面側の一側縁に二次加工が施され、刃部が作出されたスクレイパーである。素材末端側は折損し、階段状を呈しており、この部分には微小剥離痕が存在する。背面の2枚の先行剥離面の剥離方向はいずれも主要剥離面の剥離方向と同一である。頁岩製でMD47区からの出土である。

S 6は平坦打面をもつ縦長剥片である。末端は折損するが、両側縁と背面の稜線はほぼ平行し、石刃に近い形態をなす。背面の3枚の先行剥離面の剥離方向は主要剥離面のそれとほぼ一致する。頁岩製でMC40区からの出土である。

S 7は石核である。全体が比較的水磨された亜角礫を素材とし、打面調整・石核調整を施さず、自然面を打面に打点を横に移動しながら、打面と比較的鋭角に交わる自然面を作業面として数枚の剥片を生産している。残存する剥離面から復元される剥片剥離角度は110～117°前後である。頁岩製でMD47区からの出土である。

註

1　吉岡康暢「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」『庄内考古学』第18号　1982（昭和57年）

第5章　まとめ

今回の調査では空堀2条、溝15条、焼土遺構1基、柱穴46基などを検出した。出土遺物には縄文土器、中世陶器、近現代磁器、石器、木製品があるが、いずれもその出土量は少ない。以下においては縄文時代、中世、近現代について簡単に触れて、まとめとする。

縄文時代

今回の調査で検出した確実な縄文時代の遺物はＬＴ45区で出土した同一個体の縄文土器破片2点のみであるが、空堀から出土した砥石を除く石器類も該期に属する可能性が高いものと考えられる。これらの遺物は北東斜面から出土した石匙を除き、いずれも調査区南半から出土している。調査区南半部は一般にⅢ層のクロボク土を欠き、ある程度削平を受けたものとみられる。しかし、このことを考慮しても、縄文時代の遺物および遺構の分布密度は低い。今回の調査区北半には縄文時代の遺構、遺物が認められず、1972・73年の大館市史編さん委員会による舌状台地の中央部分の発掘調査によっても、弥生土器および続縄文土器は検出されているものの、確実な縄文時代の遺構・遺物が発見されていない。このことから考えると、縄文時代の遺跡の中心は調査区の北西もしくは南西側に存在するかと想定されるが、確実ではない。

中世

今回の調査での確実な中世の遺物はＬＫ60区から出土した擂鉢破片1点のみであった。2条の空堀は時期を特定できる遺物を欠くが、北東斜面の帯郭、空堀北側の柱穴群とともに既往の調査結果を踏まえて、中世城館に伴うものと判断した。これらの遺構のより細かな時期の特定は現状では困難である。

ここでは2条の空堀の特徴について簡単に触れておく。

空堀はともに全体のほぼ半分の検出で、空堀の間と両側に存在した土塁は既に削平され、消失していた。空堀には台地基部中央に浅く掘り残した部分があり、明確な構造は復元できなかったが、この部分が土塁の途切れた出入口部であったと想定できる。また、郭に対して外側の空堀の両壁には犬走が形成されるが、内側の空堀には認められない。

上述のような複数の土塁と空堀が平行して走り、一方の空堀の壁に犬走が形成される構造をもつものに、能代市大館遺跡第17区第一・第二土塁、第一・第二空濠（以下空堀とする）がある。(註1)

両遺跡を比較すると、片山館ヨ遺跡では土塁が3条存在するのに対し、大館遺跡では2条の空堀の間と一側のみに土塁が存在すること、犬走をもたない空堀が大館遺跡ではより大規模であることなどの相違が認められる。しかし、一方で犬走をもつ空堀の規模や形態、犬走をもた

ない空堀がもつものに比べ相対的に深くなることなど注目すべき類似点も存在する。

現状では、発掘調査された例が乏しく、今後の資料の増加を待たねばならないが、当該期の空堀の構造はいくつかに類型化し得ると思われる。このような類型化が空堀にとどまらず、城館の種々の構造について行えるならば、館主の系譜や地位について考古学的に接近することも可能であろう。

近現代

今回の調査で出土した近現代の遺物には空堀から出土した明治～大正ころの磁器がある。これらの遺物は空堀上位からの出土で、空堀は近現代まである程度開口状態にあったものと思われる。

覆土の特徴から近現代に属すると見られる遺構は調査区南半部に多く、空堀と調査区中央を通る市道との間には性格不明の溝が数条存在するのみである。これらの範囲は地山が不透水層に近く、多量の降雨で冠水状態になることから、居住地や耕作地として利用されることがほとんどなかったものと考えられる。一方、市道の南側では時期は不明であるが、耕作地として利用された痕跡が認められ、その方位などから何期かに分かれるものと思われる。

今回の片山館ヨ遺跡の発掘調査では、中世城館の南限と空堀の構造が明らかになったことが一つの成果と言えよう。今後、周辺の城館構造の解明が進めば、本遺跡の位置づけがより明確になろう。

註

1　能代市教育委員会『大館遺跡発掘調査報告書』1978（昭和53年）

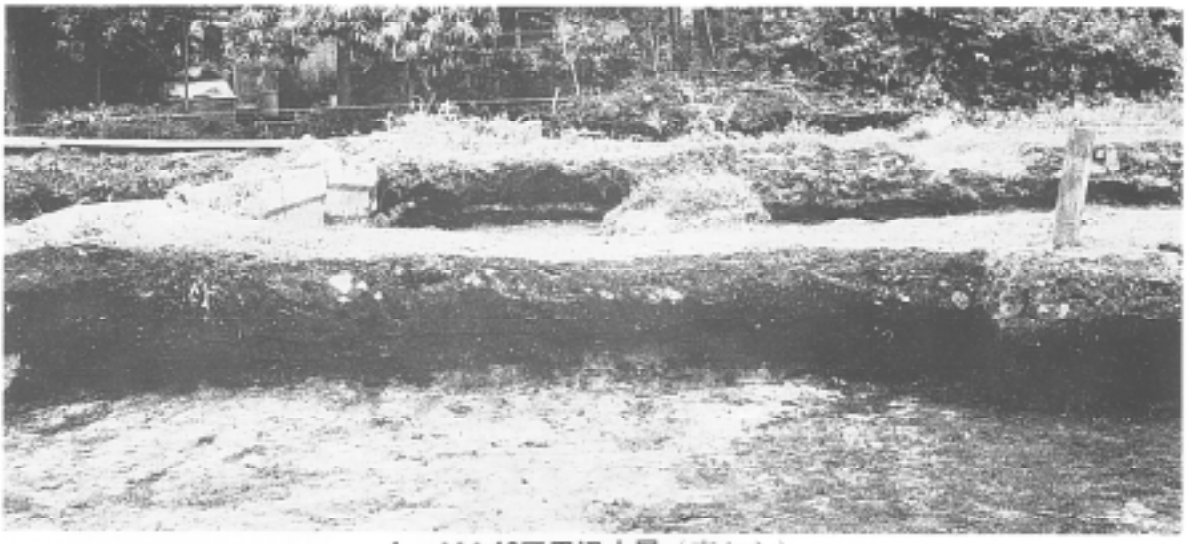
1　調査前近景（南西から）

2　調査後近景（南西から）

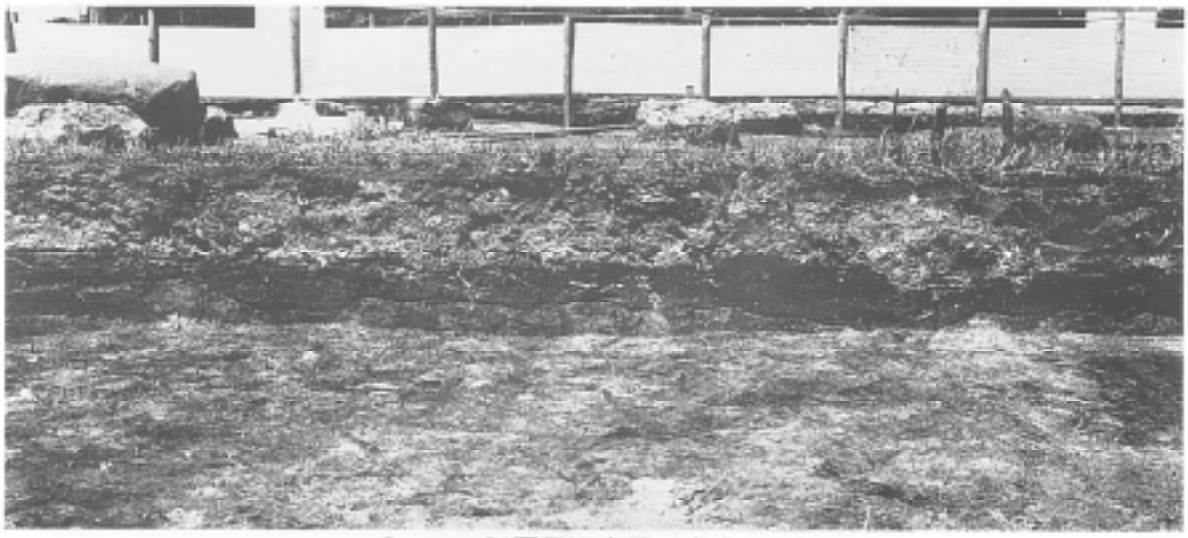
図版2

1　帯郭（北東から）

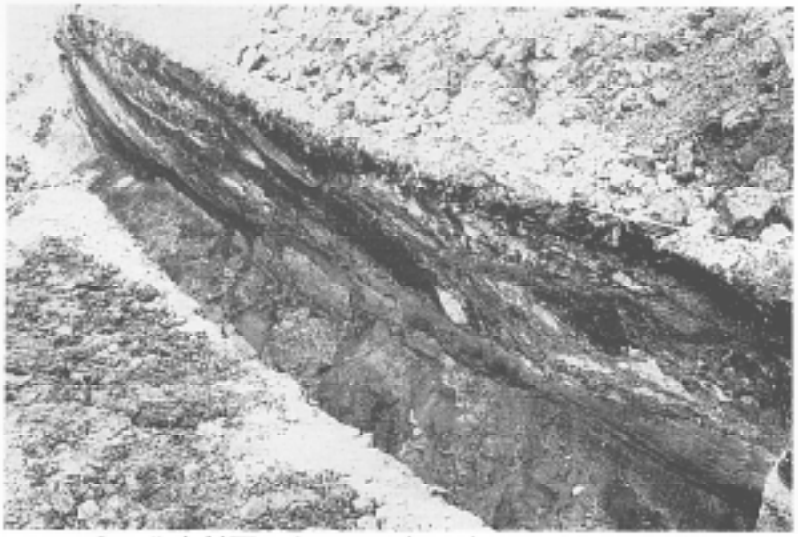
2　帯郭（北から）



1　MA48区周辺土層（東から）

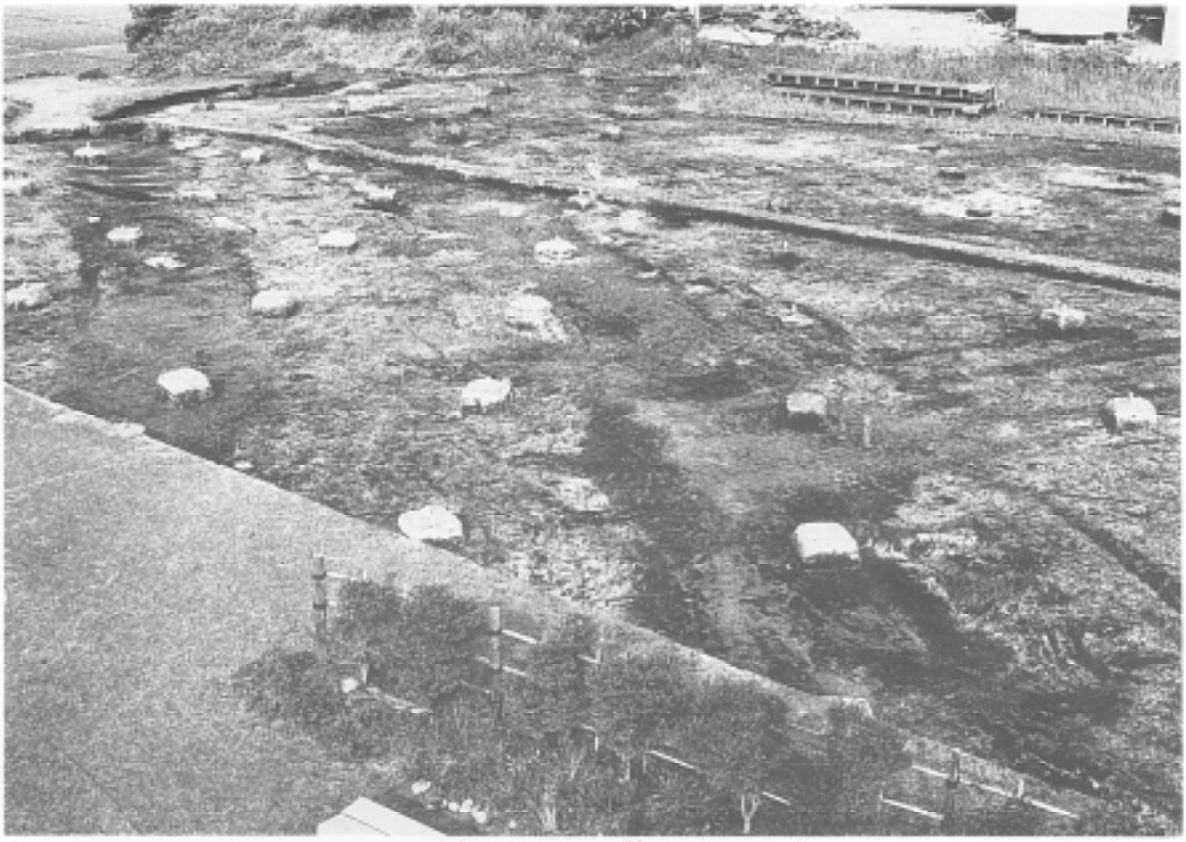


2　LQ54区周辺土層（南東から）

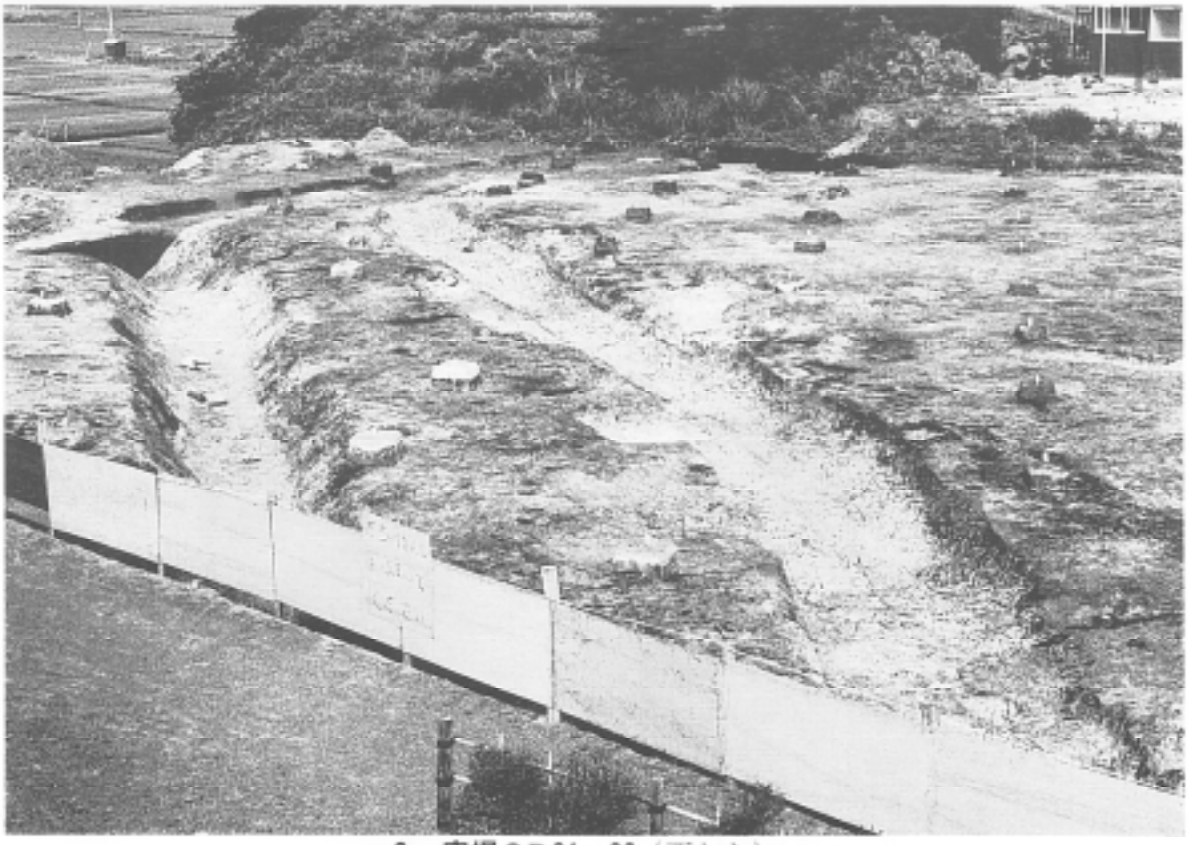


3　北東斜面3トレンチ(帯郭)土層（北西から）

図版4

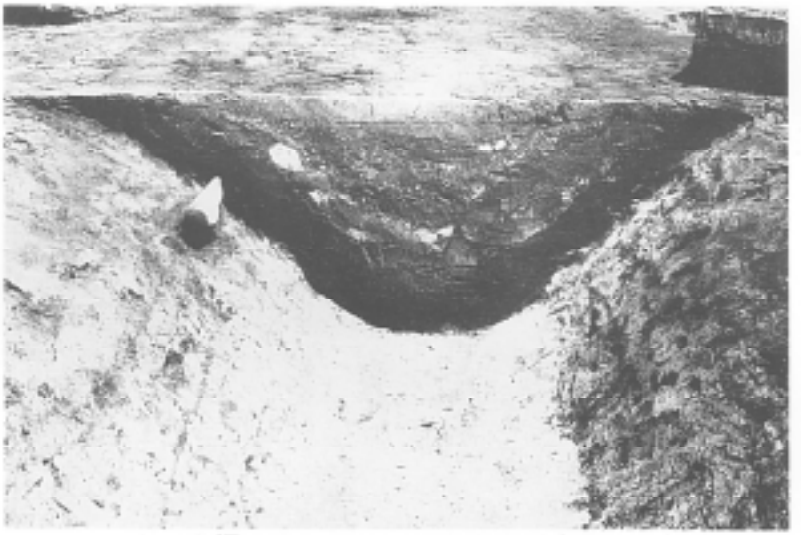


1　空堀ＳＤ01・02確認（西から）

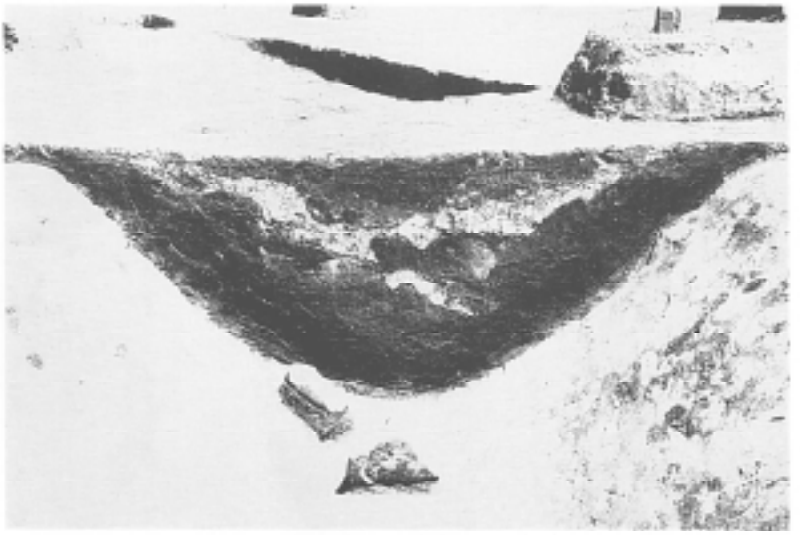


2　空堀ＳＤ01・02（西から）

1　空堀ＳＤ01（南東から）



2　空堀ＳＤ01Ａ－Ｂ断面土層（南西から）

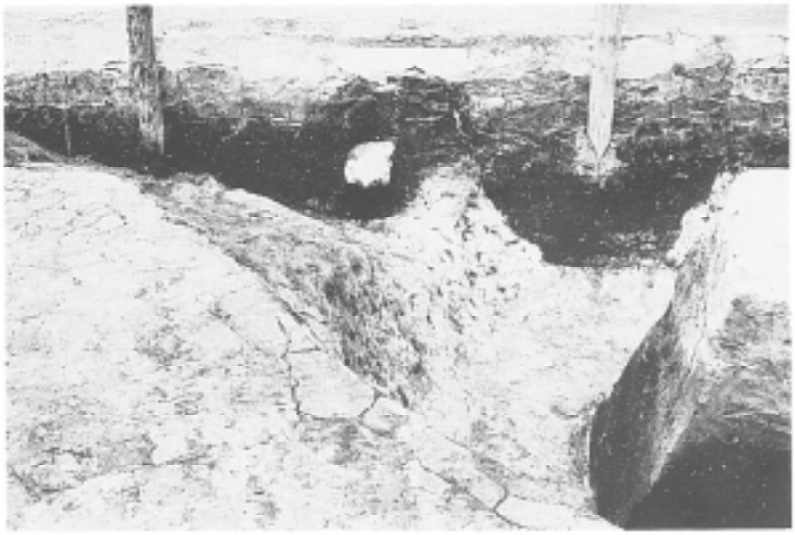


3　空堀ＳＤ01Ｃ－Ｄ断面土層（西から）

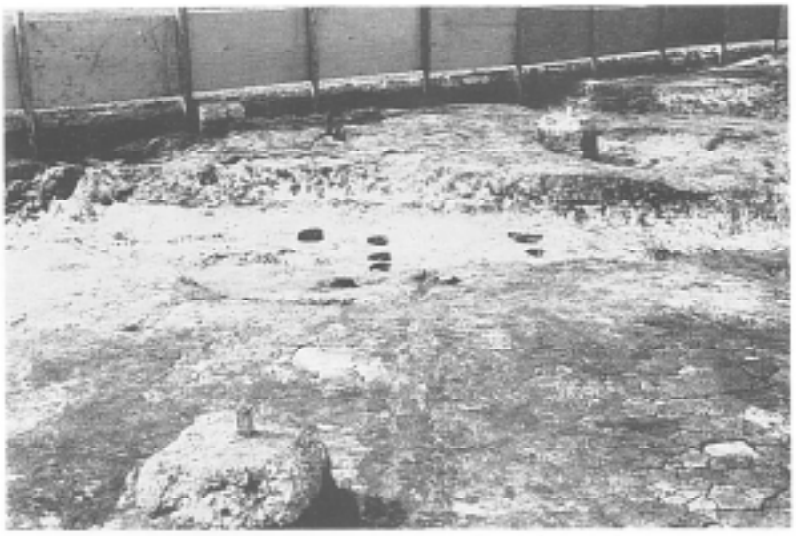
1　空堀ＳＤ02（西から）

2　空堀ＳＤ02Ａ－Ｂ断面土層（西から）

3　空堀ＳＤ02Ｃ－Ｄ断面土層（南西から）



1　空堀ＳＤ01出入口部（南東から）



2　空堀ＳＤ02出入口部（南から）

3　空堀ＳＤ01砥石出土状況（南から）

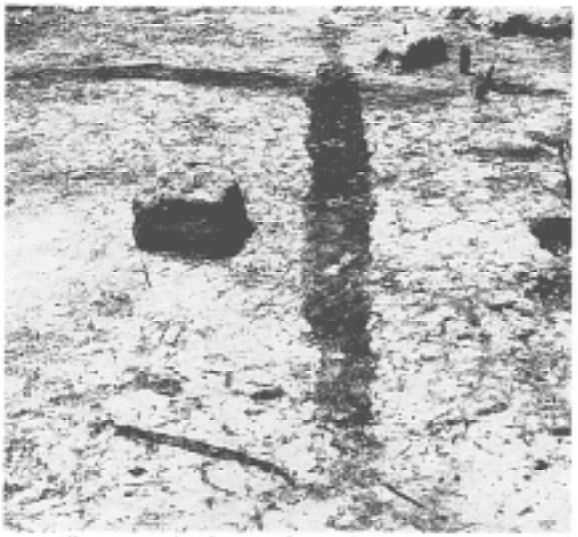
4　空堀ＳＤ02木製品出土状況（西から）

図版8

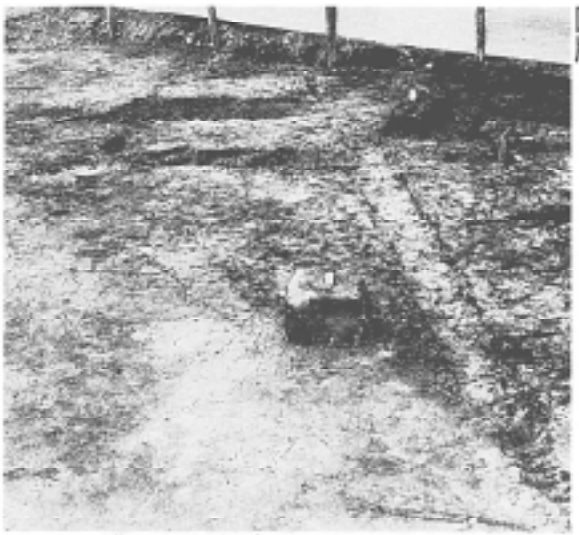
1　柱穴群（南東から）

2　溝SD03（南東から）

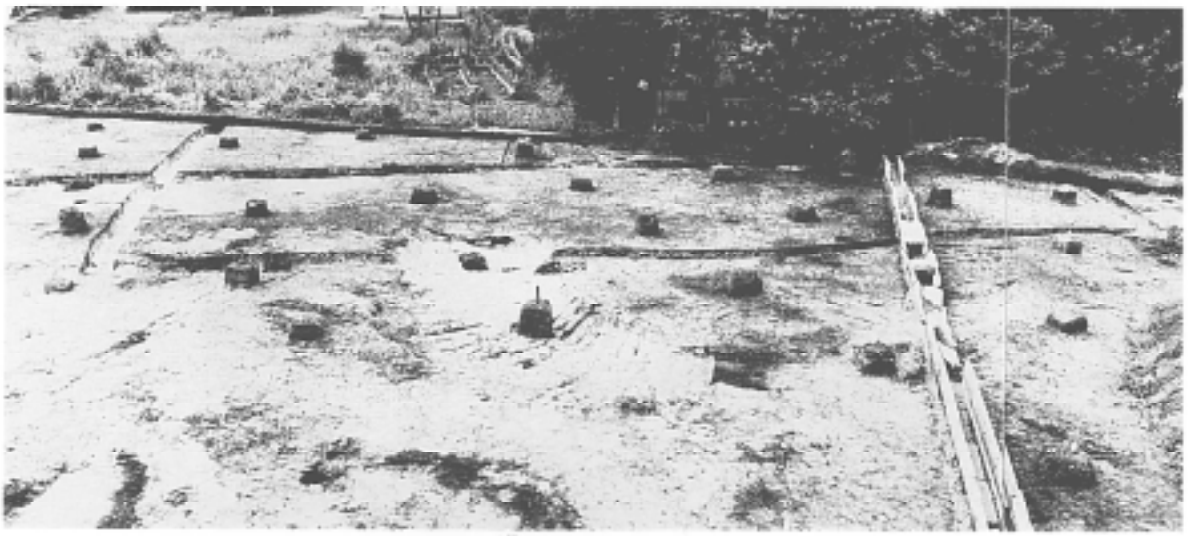
3　溝SD04（南東から）



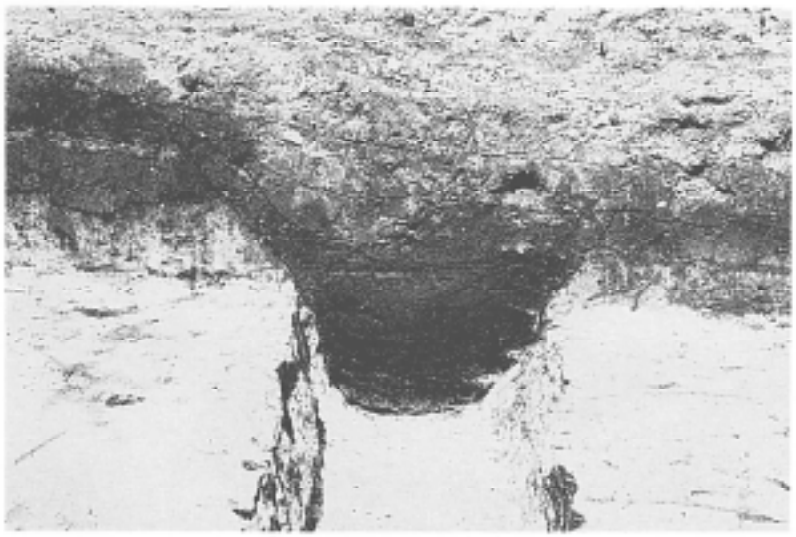
1　溝ＳＤ05(奥)・06(手前)確認（北東から）



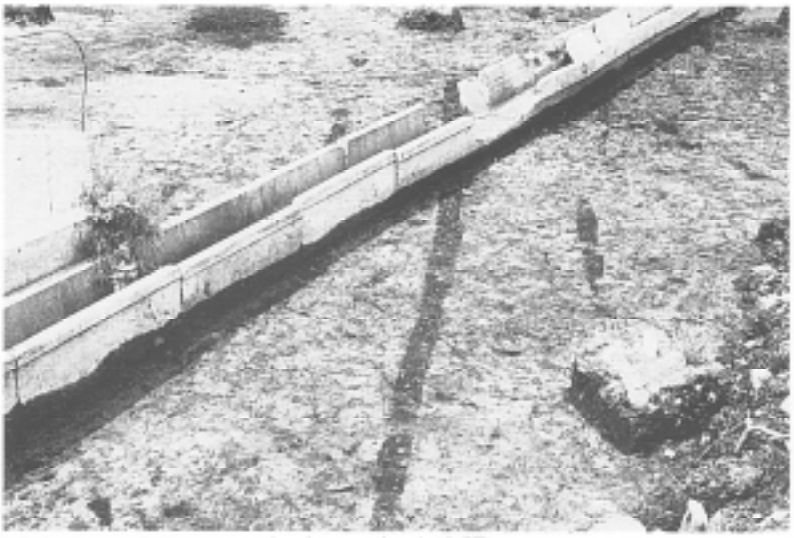
2　溝ＳＤ05(奥)・06(手前)（東から）



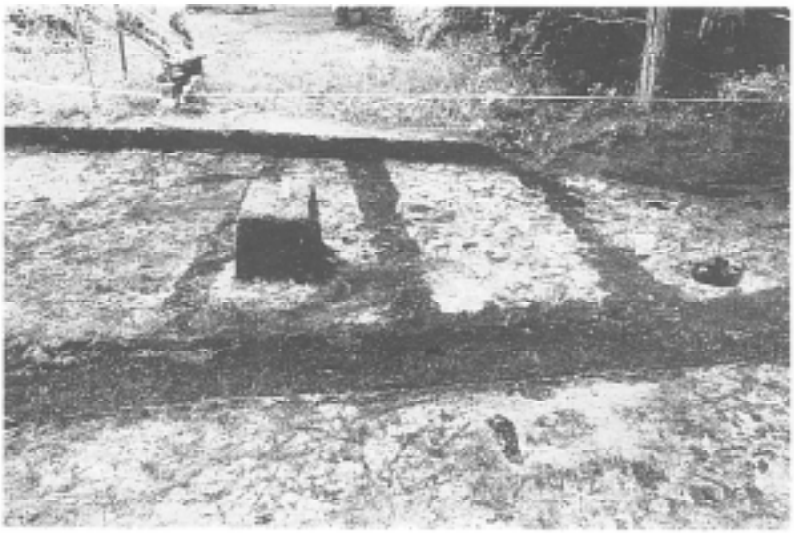
3　溝ＳＤ07（東から）



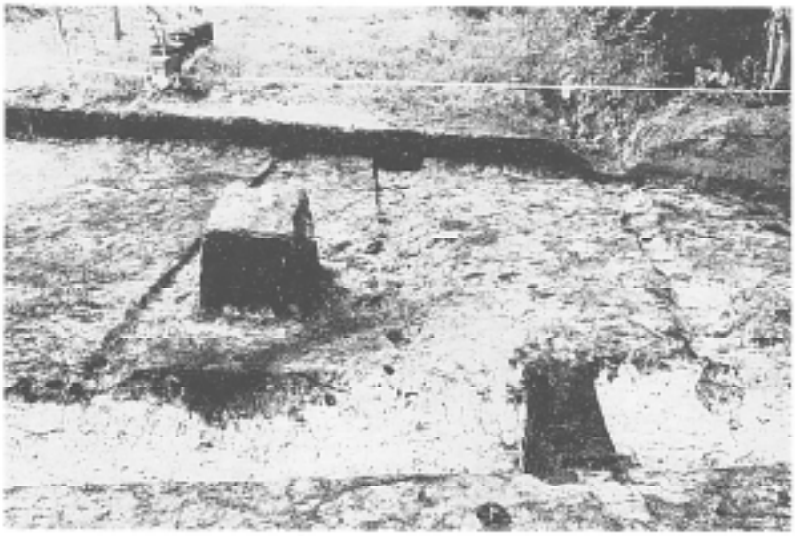
4　溝ＳＤ07土層（東から）



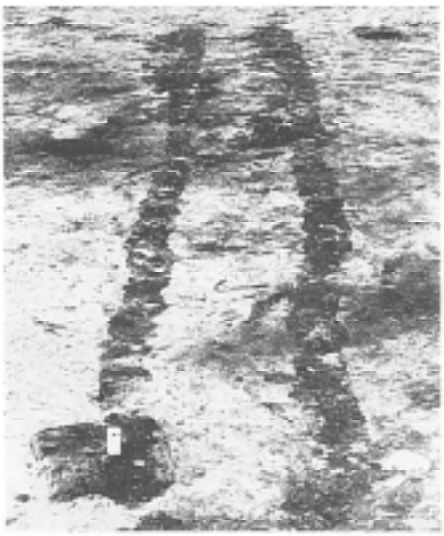
1　溝ＳＤ08(右)・10(左)確認（東から）



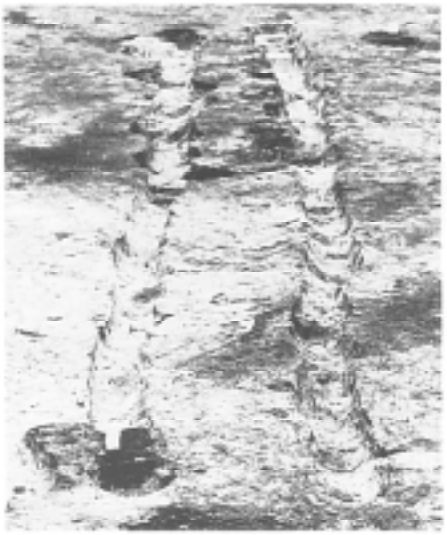
2　溝ＳＤ13(右)・14(中)・15(左)確認（東から）



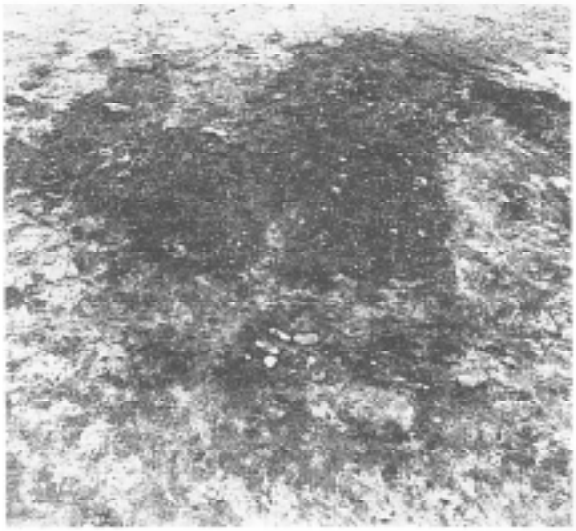
3　溝ＳＤ13(右)・14(中)・15(左)（東から）



1　溝ＳＤ16(右)・17(左)確認（南から）

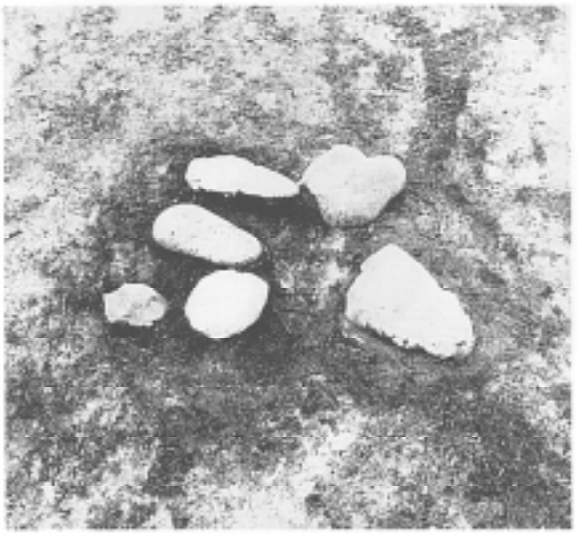


2　溝ＳＤ16(右)・17(左)（南から）

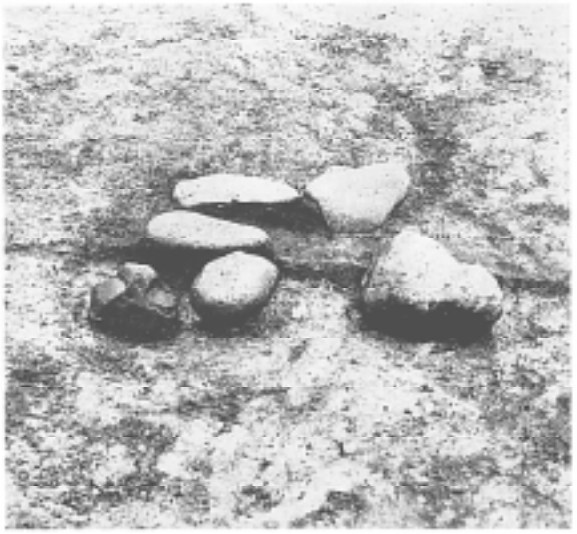


3　焼土遺構ＳＮ01確認（東から）

4　焼土遺構ＳＮ01（東から）

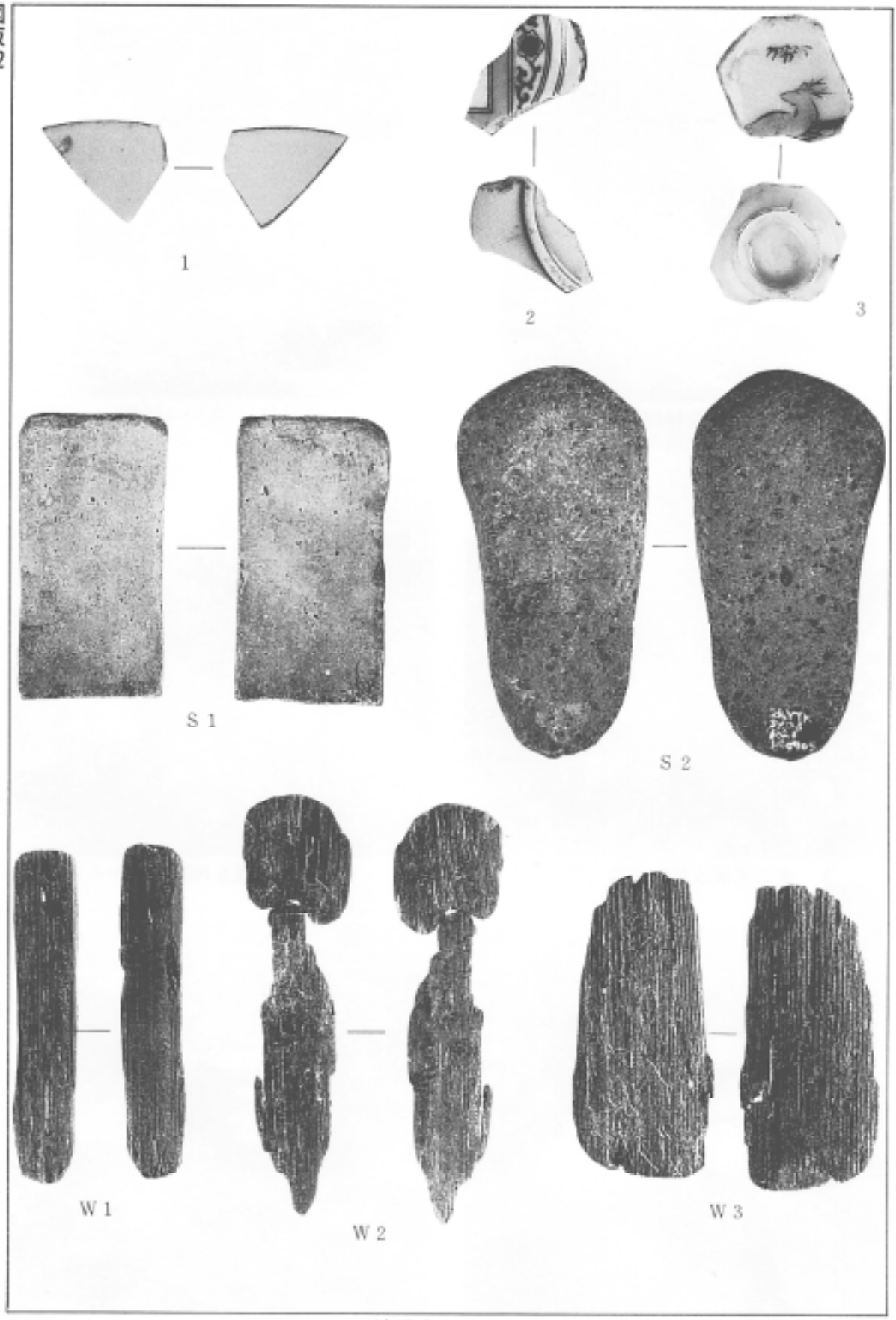


5　焼土遺構ＳＮ01礫群（東から）

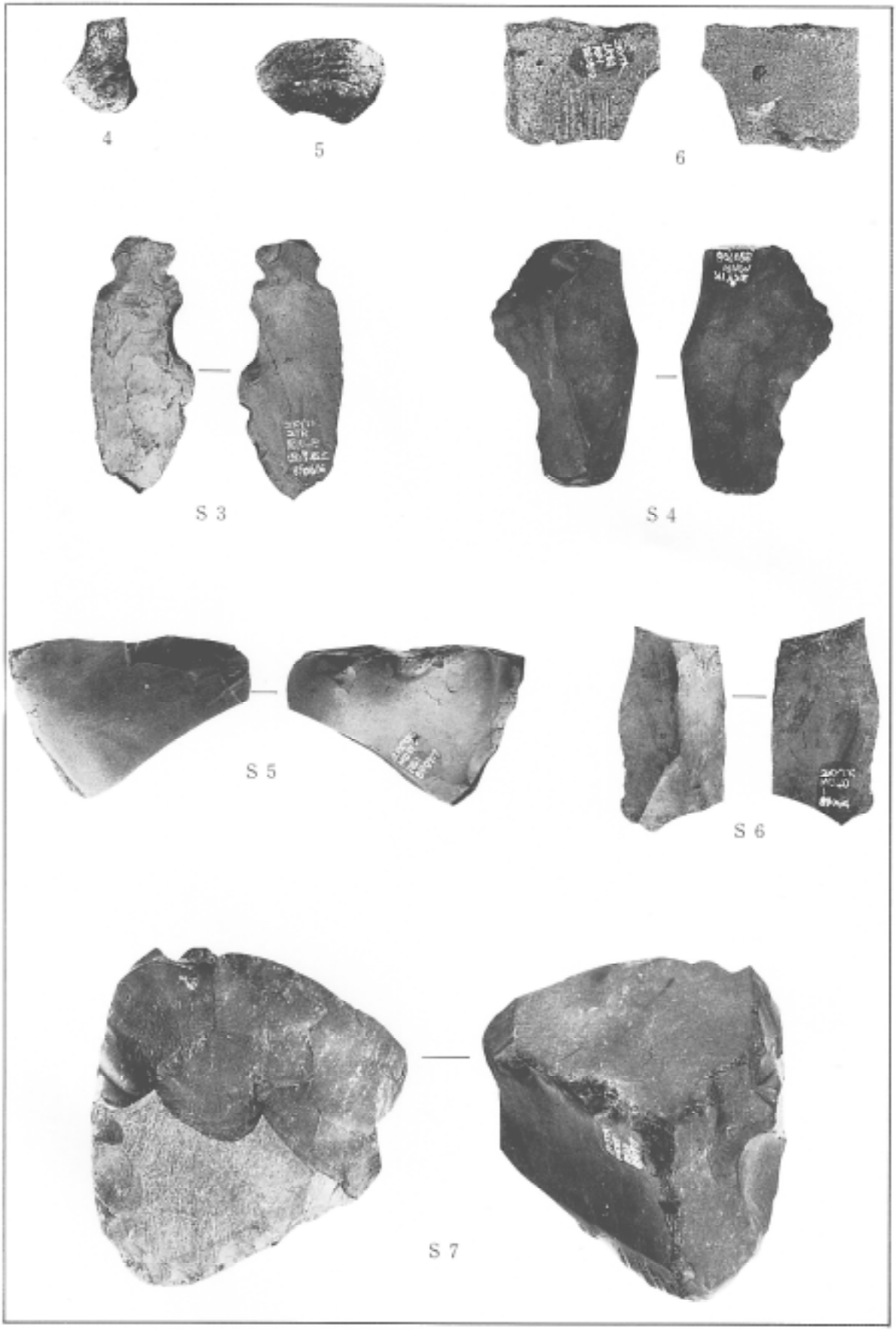


6　焼土遺構ＳＮ01土層（東から）

図版12



遺構内出土遺物



遺構外出土遺物